

だいがとどき 台形土器の研究

櫛原 功 一

はじめに

- I. 台形土器の研究史
- II. 台形土器の分類と名称
- III. 台形土器の分布と変遷
- IV. 台形土器の使用痕
- V. 台形土器の出土状況
- VI. 孔

VII. 台形土器の文様・塗彩

VIII. 台形土器の用途について

IX. 縄文土器の底部との比較

X. 使用実験からの所見

XI. 集落と台形土器

結 語

はじめに

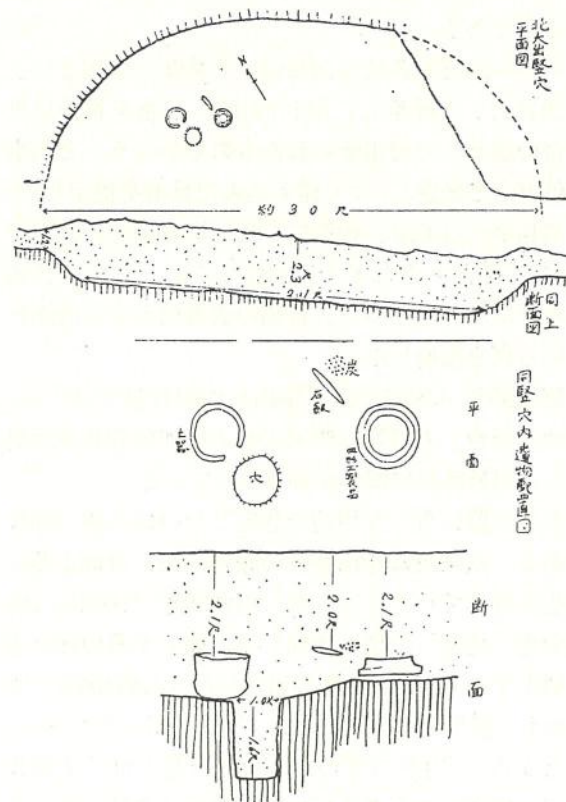
これまでの縄文土器研究は型式編年研究を主流とし、各種形式の機能的研究に対する評価は相対的に低く、取り組みが少ないのも事実である。本稿で扱う台形土器に関しては、器台説、土器製作台説等があり、1978年に室伏徹氏が初めて本格的に論文として扱った後、各地で地域的な集成が進められた。近年報告された多摩ニュータウン（多摩NTと略）No. 245遺跡での土器製作遺構や、酒呑場遺跡（山梨県長坂町）等での新たな出土事例を受け、2002年に山梨県考古学協会によるシンポジウム「土器から探る縄文社会」が開催された。資料集では台形土器の全国的な集成が図られ、土器製作台としての可能性に対する検討が行われた。同時に会場別室では山梨県内出土の台形土器が展示され、山梨近県の多くの研究者の目に触れる機会となった。それまでほとんど研究の俎上にのることがなかったせいか、土器製作台説は意外にもある種の驚きを与えた一方、否定的な見解も多くみられ、土器製作台説の認知度は低いこと、土器製作台に注目する研究者が少ないことがわかった。今日までの縄文研究の方向性が土器型式にいかに偏向してきたか、と感じた瞬間であった。

筆者は2002年シンポジウムの立案者の一人として関わりをもって以来、台形土器が土器製作台であったという仮説に基づき、各地の台形土器を観察するとともに、仮説の証明に向けて実験的な作業も試みてきた。まだ道半ばではあるが、本稿は中間報告として見解を整理するものである。

I. 台形土器の研究史

台形土器の研究史は、これまでに室伏徹氏、森田安彦氏、奥山和久氏、工藤幸尚氏らが整理されているので、先学の成果を参考にしつつまとめておく。

大正15年（1926）の『先史及び原始時代の上伊那』（鳥居1926）に、「伊那富村北大出」竪穴出土「皿形



第1図 「北大出竪穴跡発掘圖」（鳥居1926）

の土製品」として遺物写真および出土状況写真、解説が掲載されたのが初見であろう。前年7月に鳥居氏が調査を行い、報告したもので、堅穴のほぼ床直面に逆位（脚部上）の状態で作形の台形土器が出土している（第1図）。鳥居氏は「上下が孰れと決することは出来ないが、皿面を上と考へれば、（中略）上方の縁は製作後手を加えたと覚しく磨耗の痕が歴然と見える。（中略）皿面を上方に向けて皿の如き用に当てたものとも考へられるが、又逆にして物を据える台として用ひたとも考へることが出来る」と、皿または台と推測するとともに、脚端部使用痕にいち早く言及したのは卓見であった。

昭和3年（1928）の『日本原始工芸』（杉山1928）には、内面に文様、側面に孔をもつ「岩代国（福島県）袋原」出土例を「有孔土器」として、底部に孔をもつ濾過器的な土器の一群として掲載された。受け面を底部として見誤ったものである。

昭和7年（1932）、八幡一郎氏は姥山貝塚の報告の中で、姥山貝塚出土2点ほか、南多摩郡堺村例、先の伊那富村例、袋原例の計5点を「台状土製品」として図示し、口縁（脚部）平坦、底（台面）が極めて厚く、「透孔」があることを特徴としてあげ、「一種ノ器台」と推測した。台として認識した最初の考察である。

同年、志村滝蔵氏は山梨県坂井遺跡の事例を「土器製高台」と呼称し、「祭りの時、品物を神前に供す台の膳として使用せられたものであろう」と祭事の供献台と推定し、より踏み込んだ見解を提示した。

昭和8年（1933）、後藤守一氏は榎原遺跡の報告で「台状土製品」として7点の出土を記し、用途は明らかではないとしつつ、台部の表裏面がよく磨かれている点を指摘した。

昭和30年（1955）の『平出』の報告書では、「いわゆる器台」の時期は勝坂式および加曾利E並行期とし、帰属時期に関心が寄せられている。

台形土器に新たな用途を想定したのは八幡一郎氏である。八幡氏は姥山遺跡の報告以来、台形土器に関心を寄せていたとみられ、昭和38年（1963）、『陶磁全集 縄文 土器・土偶』で、縄文土器の作り方を解説する中で台形土器に言及した（八幡1963）。すなわち「勝坂式土器の底面は、平坦で滑らかである」ことから、「円形の平台つきの土製品」は「土器作り用の作業台かと考へている。側面にあけられた孔は、これに指をかけて回すためのものであろう。即

ち一種の回転台ターン・テーブルだと解されるのである」と、土器製作台説を提示するとともに、坂井遺跡例の写真キャプションに「円形の回転台」と付けている。土器底面が平坦な点からの着想は優れたもので、土器製作台としての視点から孔の機能についても初めて言及した。短文ながら学史的には評価すべき推察である。

その後、『坂井』の報告で志村氏は「器台」の用途に関して、住居址内で土偶との伴出事例が多いことから祭器の一種か、あるいは土器の製作時の回転台として使用した可能性もあるとして、八幡説をいち早く取り入れている（志村1965）。坂井遺跡にはいくつかの形態が存在することから、「鐙付の器台」「鐙の無い器台」「平盤作り」「車輪形」などと分類しているのも注目される。

八幡氏の土器製作台説を強く支持したのは新井司郎氏であろう。新井氏は加曾利貝塚で土器作りを繰り返し実験的に試み、成果を『縄文土器の技術』（新井1973）にまとめている。その中の「土器の台」という項で、土器作りを行う際に水平面の確保がいかに重要であったかを説明したうえで、「器台」は「その上面が、ことさら平坦に、しかもていねいに研磨されており、土器を成形する台として、もっともふさわしい製品である」と述べた。ただ、新井氏が実際に台形土器で製作実験を試みたかどうかは定かではない。

1976年、室伏徹氏は「台形土器について」という論文を発表した（室伏1976）。研究史の整理、全国的な台形土器の分布状況、一遺跡からの出土点数等を概観したうえで、坂井遺跡の資料を報告した。その中で台形土器の分類、孔、脚など各部位の機能と変遷、転用底部例の存在など、実に様々な視点から台形土器を観察し、中でも孔（「受動具」）の配置型式には重点的に検討が加えられ、土器の縦区画文様との関連性について論じた。また台形土器の出現については転用底部との関連性を指摘した。室伏氏は本文中で明確に土器製作台説を主張していないが、註に、受動具の配置型式が土器製作において「ある種の分度器のような役割を果たすことができる」と記すなど、氏が土器製作台説に立つことは明らかである。また名称については、弥生時代以降の「器台」と区別するために「台形土器」とした、とあることから、機能的に供献台としての台ではなく、土器製作台を念頭に呼称名を区別する意図がわかる。ただ、一瞥したのでは用途論についての見解を読み取るこ

とが難しく、優れた視点が埋没することになったのは惜しい。いずれにせよ台形土器研究の新たな段階を切り開いた点で画期とされる業績である。

1978年刊行の長野県曾利遺跡の報告(武藤1978)では、39号住居址から「器台」が出土し、「他の生活用の土器が1点もないのに、器台と有孔罫付土器だけが残されていた事実」や井戸尻4号住での両者の共伴例から、それまでは「土器焼成の際、その台座として使用されたというのが今までの考え方」であったが、「器台は、有孔罫付土器の台」という結論を導びいている。今日でも井戸尻考古館の常設展示では、台形土器に載せられた有孔罫付土器があり、以後、長野県での台形土器の用途説としては根強いものとなった。なお、土器焼成台という説については、『井戸尻』(武藤1965)で報告された台形土器の二次焼成痕から、武藤雄六氏が想定した用途であったと思われる。

1979年、小林達雄氏は土器の様々な用途の一例として「器台」をあげているが、「容器以外の用途をもつ土器として注意される」と述べるに留めている(小林1979)。

1980年に山梨県勝沼町・一宮町で釈迦堂遺跡群の調査が実施され、多数の台形土器が出土した。報告書(小野1986・1987、長沢1987)では約300点近くの台形土器が報告され、山梨県域は台形土器の多地域として知られることとなる。ただし、残念ながら報告書では台形土器に対する考察はない。

1982年に刊行された『神谷原Ⅱ』では36点の「器台」が報告された(沼崎1982)。接地面に同心円方向に回転したことを示す条痕がある例や、脚部が剥離した後も摩滅した例に注意している。

1983年、上川名昭氏は長野県・山梨県・東京都を中心に、未報告事例を含む58例の「器台形土器」の集成を行った(上川名1983)。地域的に量の多寡があることを述べ、釣手土器や有孔罫付土器などとの共伴例があることから、特殊な祭器の供献台説を支持した。また多量出土遺跡について注意を払い、台形土器の製造跡と考えたほか、平盤型は土器の蓋と推測している。

1985年には岩淵一夫氏により全国集成が試みられ、青森県から長野県までの「器台形土器」(「器台」)60点が集成された(岩淵1985)。さらに「裾部径」(脚部径)と「器受部径」(受け面径)の比率を検討し、時期的な変化を探ろうとした点が注目される。

また変遷として勝坂期の武蔵岡遺跡例、神谷原遺跡例を最古例とし、大木10式期にかけて増加する中で、大木9b式期に受け面から斜めに脚が広がるタイプが一般化することを指摘し、時期的な形態変遷の見通しを示すとともに、朱塗り例、スス付着例の存在を指摘した。

同年、茨城県では斉藤弘道氏により茨城県内8遺跡24点の「器台形土器」が集成され、形態分類、時期的な変遷について言及されている(斉藤1985)。

1986年には相模原市橋本遺跡の報告書で、台形土器の受け面外周部に炭化網代痕が付着し、二次焼成を受けた事例2点が報告された(大貫1986)。そのほか、多くの受け面に外周と中央部を除き「ドーナツ状の擦痕」をもつことを指摘している。

1987年、森田安彦氏は、東京都前田耕地遺跡の「台状土製品」について、その器形が五領ヶ台式期の深鉢底部に類似することから、「台状土製品」が底部の転用事例を模倣する形で出現した可能性について論じた(森田1987)。

さらに1990年に森田氏は「器台形土器」を5分類し、各級の分布と時期を整理したうえで東京、埼玉、神奈川、千葉、長野での出土量を検討した(森田1990)。埼玉・東京の台形土器の計測値表を作成し、勝坂期に器高が低く、中期末に高くなる傾向を指摘した。用途については接地面の磨耗から「器を載せるための台と考えるのが妥当」としながらも、伴出事例から「日常生活に使われていた器種を載せたとは考え難く、非日常的な器種が特定の場面に器台に載せられ使われたと推測される」とした。

1997年、奥山和久氏は1都18県の100遺跡から937点を集成し、名称については八幡一郎氏の姥山遺跡の報告にさかのぼって「台状土製品」という用語の使用を提唱した(奥山1997)。時期的には五領ヶ台Ⅱ式期から勝坂Ⅰ式を初現とし、東北地方では後期初頭にかけて使用されたことを明らかにしたが、機能・用途については先送りした。

1998年には台形土器用途論に重要な状況証拠となる多摩NTNa245遺跡の報告書が刊行された(山本1998)。調査自体は1989年に実施されたもので、その中の51号住居では床面東壁近くに粘土ブロックが広がり、その中にバックされた状態で「器台」、曾利Ⅱ式の未焼成土器などが発見されている。山本孝司氏は、堅穴の一角が土器製作に関する作業空間であったと想定し、未焼成土器を「器台」の上で乾燥

中、何らかの要因で粘土によりパックされた状況を推測した。台形土器には受け面、接地面に回転使用による擦痕が観察されている¹⁾。

1999年、多摩NTNa72・795・796遺跡の報告で、131点の「器台」のうち接地面に磨耗痕が確認された資料は7割を越え、回転運動による形成が考えられることから、土器製作台説の証左になりうるとした(丹野1999)。孔については文様分割線の基準として利用可能であることが述べられている。

1999年に刊行された『山梨県史 資料編2』で、新津健氏は「器台形土器」に関して次のような用途の説明を行った(新津1999)。

「土器をのせる台というのが一般的である。(中略) 祭りに関わる土器をのせたり、儀式の際に用いる道具の可能性が有る。(中略) 上面が凹面状になっているものもあり、これ自体が盛り付け道具ともなりうる。さらには土器作りの台という見方もある。(中略) 円盤が粘土こねを含めた土器造りに用いられたものとすれば、器台とした中にもこのようなものが含まれている可能性もある。海岸地域ではクジラなどの脊椎骨が出土することがあり、器台形土製品の原形になったという見方もある。」

これは台形土器に対する一般的な見方として受け止めることができ、今日でもこうした理解は大きく変化してはいない。

2001年、阿部勝則氏は岩手県内の「器台」12例を集成し、形態分類、分量、孔、文様、使用痕、時期に関して整理し、大木8b式期以降、後期初頭まで存在すること、台径は小さく、器高は高くなる傾向などを指摘している(阿部2001)。機能については器台、製作台のほか、調理具としての使用法を紹介し、土器の底径との関連性について指摘した。

2002年12月、シンポジウム「土器から探る縄文社会」が山梨県で開催された(山梨県考古学協会2002、2002年シンポと略)。資料集には全国の縄文時代の土器製作関連遺構・遺物を集成し、土器製作遺構としては粘土採掘坑、粘土貯蔵施設、土器焼成遺構等、土器製作関連遺物として焼成粘土塊、磨き石とともに台形土器を取り上げた。資料集では数本の紙上発表を掲載するとともに、実物資料の展示を行い、土器製作台説について検討した。

紙上発表の冒頭で、室伏氏は「台形土器研究の現状と課題」として今日までの研究史を整理し、脚端部に回転した痕跡をもつことなどから、「土器をつくるための土器」、つまり回転台(土器製作台)説がほぼ確定した状況にあるとしたが、台形土器の用

途は終末期まで同じではなく、器台として用途が変化した場合があることも想定した(室伏2002)。また氏独自の発想である文様割付の目印としての孔の機能についても改めて説明している。

保坂康夫氏は酒呑場遺跡(長坂町)で堅穴内に2点の完形品が近接して出土した例、粘土塊とセットで出土した例、堅穴内ピット中から粘土塊とともに出土した転用底部例を報告した(保坂2002)。そのうえで円卓形タイプについては、脚端部の使用痕が平坦面を形成することから、地べたではなく板などの平坦面上で使用されたこと、ヒビの入り方から垂直方向の断面疲労の可能性があると、土器製作台の可能性があるとした。円盤形タイプについては表面の鉱物粒の欠落、円弧状のヒビ割れ、出土状況から粘土をこねる板とする新説を提示するとともに、いずれの場合も実験的検証の必要性を説いた。

正木季洋氏は原町農業高校前遺跡に円盤形が多く、接地面に擦痕が無いことから、円盤形は円卓形とは異なった使用方法があったと推測した(正木2002)。

榑原は、山梨県内で台形土器が出土する遺跡は拠点集落で、限定的であり、土偶や土製品の出土が多いといった特徴があることを述べ、土器作りのムラが縄文時代中期には存在し、土器が商品価値をもって流通していたとする仮説を述べた(榑原2002)。

2002年シンポの後、台形土器に注目していち早く論文をまとめたのは工藤幸尚氏である(工藤2004)。千葉県稲荷山遺跡の台形土器を報告するにあたり、実体顕微鏡を用いて使用痕観察を行うとともに、台面のヒビや出土状況を検討した。工藤氏は「使用痕の存在を一概に土器製作台としての証左と決めつけるのは危険である。良好な出土状況に恵まれない現状においては、用途に関わる諸説を一旦棚上げにして、台形土器自体にみられる使用痕の分析から、その形成要因・過程を推測するという手順が妥当であろう」と述べ、最終的には実験的な手続きの必要性を指摘した。

また長野県在住の田中洋二郎氏は台形土器を用いた使用実験を試み、土器製作台としての有効性を確かめた。後述するように、台形土器が製作途中の土器粘土中の水分を吸収し、効率的な製作が可能になる、という重要な指摘をしたもので、実験を通して初めて判明した事実である。

以上、冗長になったが順を追って研究史を概観し

た。八幡氏の土器製作台説の提示の後、室伏氏の論考を画期として各地で集成が図られる中で、多摩NTNo.245遺跡の調査事例が明らかになり、土器製作台説が大きく注目されるようになった。その後、2002年シンポの開催を受けて使用実験が行われるなど、静かな研究の盛り上がりを見せている。

II. 台形土器の分類と名称

台形土器の分類には、古くは坂井遺跡での志村滝蔵氏の分類があり、一般的には室伏氏のA型(無脚)、B型(有脚で鏝をもつ、鏝断面形で3種に細分)、C型(有脚で鏝なし)の3大別が用いられ、さらに近年では奥山氏の分類のように転用土器底部を台形土器に加える傾向がある。ここでは転用底部を加えた4大別を用いることとする。

A類—円盤状の無脚タイプ(円盤形)。

B類—鏝のある有脚タイプ(円卓形)。

C類—鏝のない有脚タイプ(円筒形)。

D類—転用底部を一括する。器壁を脚部として残すものと円盤状のタイプがある。

B類とC類の間接的な事例が関東、中部地方に散見されるが、鏝を意識した張り出しがあればB類に、脚部から受け面に曲線的に推移する滑車状を呈すものはC類に含めた。

A類には表裏の区別が困難なものがあり、両面が同程度に丁寧に調整された例、両面に使用痕をもつ例がある。しかし多くは受け面側を非常に丁寧に仕上げ、また断面形が逆台形になるように、受け面側の径をわずかに大きくしている。つまり地面に受け面を上にして置いた時、持ち上げるのに指がかけられるように逆台形に成形したらしい。

部分名称については室伏氏にならい、上面の円盤を「受け面」、立ち上がりを「脚部」、脚部側面の穴を「孔」、脚部先端を「脚端部」(接地面)、B類の受け面張り出しを「鏝」と呼称する。

III. 台形土器の分布と変遷

2002年の台形土器の集成時点では、東は青森県から、西は岐阜県、石川県まで、東北から中部に分布する。集成では279遺跡、1622点を数えるが、その中には台付き土器の台部が含まれているほか、出土例の漏れが相当数ある。またその後の出土例も多い

ことから、今日では全国でおおよそ1700点であろうか。東京都・神奈川県・山梨県では約200~600点と非常に多く出土し、次いで群馬県・長野県・千葉県・埼玉県・茨城県・福島県で約20~80点、それ以外の地域では数点~約10点と非常に少ない。なお各地での出土遺跡名、台形土器の形態等の詳細については2002年シンポ資料(山梨県考古学協会2002)に譲る。東北地方 福島県、岩手県にやや多いが、そのほかの県では1~数点である。大木8b式期以降、中期末、後期初頭に存在し、他地方よりも明らかに遅れて普及し、遅くまで存在することがわかる。C類を主とし、A・B類はわずかである。大木10式期に脚部外面に縄文施文するものが目立つ。岩手県内の様相について阿部勝則氏が整理しており、東北地方の傾向を概観するのに参考になる(阿部2001)。

関東地方 神奈川県、東京都は中期中葉~前半、茨城県、栃木県、千葉県、群馬県は中期中葉、勝坂3式期頃から出現する。終末については、茨城県では中期末まで、その他の地域では中期後半、加曾利E3式期まで多く存在するほか、栃木県馬門南遺跡、寺野東遺跡には称名寺式期とされる資料があり、栃木県では後期初頭まで存在するらしい。いずれにせよ、栃木・茨城両県は東北地方に近いことから、関東地方よりも遅くまで残る傾向がある。

器形は受け面径が大きく、器高の低いものから、受け面径が小さく、器高の高いものへと変遷する。勝坂3式期から加曾利E1式期ではB類、加曾利E1式期以降はC類が主となる。

中部地方 日本海側の石川県、富山県には中期中葉期と思われるB類がわずかにあり、新潟県では中期後半と推定されるC類の事例が近年増加している。

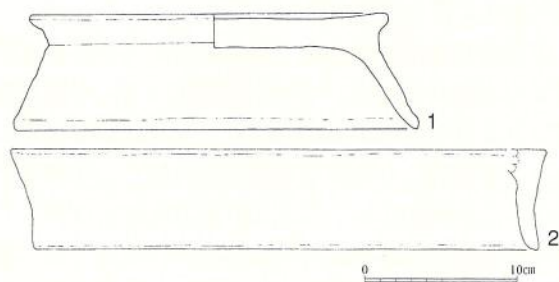
山梨県域では釈迦堂遺跡群をはじめとして韮崎市坂井遺跡、長坂町酒呑場遺跡、原町農業高校遺跡、塩山市安藤寺遺跡、町田遺跡のように1遺跡で多数の台形土器を出土した遺跡があり、それらは地域の拠点集落である場合が多い。

山梨県では釈迦堂遺跡で藤内式期から曾利II式期までの事例が充実し、井戸尻式期にA類、C類が確認できるほかは藤内式期以降、一貫してB類主体である。形態的にも大きな変化は認め難く、中期後半になってもB類のみである点が周辺地域とは大きく違う。釈迦堂遺跡群以外の山梨県域の状況では、釈迦堂遺跡群に近い勝沼町宮之上遺跡6号住で五領ヶ台IIb~狼沢式古段階のA類2点、短脚をもつC類

1点、猪沢式古段階のD類2点が存在する。それらは器高がいずれも低く、C類、D類はほぼ同形であることから、森田氏のいうようにD類の転用底部をモチーフとしてA・B類が出現した可能性がある。五領ヶ台式期にさかのぼる例としては他に双葉町唐松遺跡・中道町上の平遺跡22号住に短脚C類の例があり、猪沢式期の例に唐松遺跡のA類がある。新道式期の例にはD類無脚の桂野遺跡2号堅穴例、桂野平石遺跡例のD類有脚がある。藤内式期以降はB類主体で、脚部に孔をもつものが見られる。そうした中で藤内式期に有脚D類があるほか、井戸尻式期、曾利I式期にC類がある。その後、曾利III式期以降、著しく衰退するが、柳坪B遺跡16号住(曾利V式期)にC類がある。中期後半のC類は坂井遺跡をはじめ、八ヶ岳南麓にあり、長野県域の影響かと考えられる。

ところで、塩山市大木戸遺跡2号住(諸磯b式)に2点の台形土器(第2図)が報告されている(石神2003)。1は短い鑿をもつB類に類似し、受け面は中期の台形土器同様に非常に丁寧なナデが行われている。2は径の大きなC類である。ともに脚端部には磨耗痕はない。埼玉県水子貝塚例(黒浜式期)にも台形土器があるとされ、前期にすでに出現した可能性を示す資料といえる。ただ諸磯c式期～前期末の事例がないので、ただちに台形土器の初現例として位置づけることには躊躇を覚え、今後の資料増加に伴ってあらためて注目すべき資料といえよう。諸磯式期は台付き土器、特殊な鉢形土器など、それまでに見られなかった多様な器種が登場する時期でもあるので、いろいろな器種のひとつとして単発的に考案されたのかもしれない。

山梨県域の台形土器の変遷を整理すると、五領ヶ台式期から井戸尻式期にかけてA類、藤内式期から曾利III式期にB類、五領ヶ台式期～曾利I・V式期にC類、五領ヶ台～新道式期にD類がある。器高が



第2図 大木戸遺跡の台形土器 (1/5)

高くなるのは藤内式期にB類が出現してからで、脚部の孔の発生と同時期で、孔の出現を機に器高が高くなった可能性がある。

長野県ではA類が新道・藤内式期、B類が井戸尻式期から曾利III式期、C類が藤内式期から曾利V式期に存在する。A・B類の消長はほぼ山梨県域と同じであるが、C類のあり方は関東地方に近く、中期末まで存続する点が特徴である。長野県域は中期後半に加曾利E式土器の影響が強く流入するといわれ、甲府盆地を避けて東信地方から伊那谷方面に土器文化の流れが想定されている。そうした動向に合致するように台形土器C類の消長が認められる。

長野県域で台形土器を複数出土する遺跡はあるが、山梨県域ほどではなく、八ヶ岳西南麓以西では甲府盆地側に較べて格段に少ない。茅野市域では多数の大集落の調査例があるものの、台形土器は多くはない。そうした中で、下伊那郡豊丘村伴野原遺跡では台形土器のほか焼成粘土塊が多く出土し、集落内での土器製作を物語る資料となっている。

静岡県域では藤内式期～曾利III式期に確認できる。藤内式期～曾利I式期にB類、曾利I式期～曾利III式期にC類が存在し、ほぼ山梨県域と同様な消長である。出土量は少なく、山梨県に近い富士川下流域以東の東部に分布する。

岐阜県域ではB・C類が中期中葉～後半にわずかに存在し、長野県域の影響と考えられる。

以上、全体を整理すると、山梨県から西関東に五領ヶ台～新道式期(勝坂1式期)のA・C類が分布する。おそらく底部転用のD類を模倣するかたちで出現したと考えられる。当初、器高は数cmであったが、藤内式(勝坂2式期)期以降、器高が高さを増すC類に加え、B類が東京・神奈川・埼玉から長野県域にかけて出現し、脚に孔をもつものが多くなる。中期中葉(井戸尻式期・勝坂3式期)には千葉・群馬県から栃木・茨城県域にも波及し、中期後半、大木8b式期には岩手県域をはじめとする東北地方にも波及する。やがて山梨県域では曾利III式期、西関東では加曾利EIII式期頃に減少する。その後、長野県域を中心に中期末まで存在するほか、栃木県以北の東北地方では後期初頭、称名寺式期まで存在する。

このように甲府盆地～西関東で発生した台形土器は、周辺に次第に伝播し、青森県から岐阜県まで分布域を拡大する。中期末に台形土器の中心地域であった甲府盆地域ではいち早く消滅し、関東地方でも

なくなるが、周辺地域では中期末から後期初頭にも存在し、圏論的な分布変遷が認められる。

IV. 台形土器の使用痕

台形土器の使用痕には受け面、脚端部の磨耗痕、粘土状付着物、ヒビがある。ここでは以下の資料についての筆者の観察データを中心に説明する。その他の遺跡については報告書の記述を参考にした。

- 山梨県—酒呑場遺跡 (10点)、原町農業高校前遺跡 (17点)、
 釈迦堂遺跡群 (42点)
- 神奈川県—橋本遺跡 (10点)、上中丸遺跡 (3点)、下原遺跡 (2点)、
 田名花ヶ谷戸遺跡 (3点)
- 東京都—多摩NT遺跡群No67・72・191・226・245・300・
 471 (計16点)

受け面の剥離痕 受け面の使用痕については、室伏氏によって脚端部、孔の使用痕とともに注目され、報告書で観察された事例としては、工藤氏の論考にあるように、橋本遺跡、釈迦堂遺跡群、滑坂遺跡、多摩NTNo245遺跡、稲荷山遺跡などがある。

橋本遺跡では1例を除き「いずれも外周と中央部を除き、ほぼドーナツ状の擦痕がみられた」と記され(大貫1987)、滑坂遺跡では「受け面中心は器面が剥落する」とある(佐々木1988)。

多摩NTNo245遺跡51号住例については、「台部と脚部の底面に、回転使用により生じたと思われるスレ・磨耗痕」が認められ、ほかに磨耗痕をもつ2例が確認されたことから、「器台を回転させ、時には器台に載せた対象物を回す」といった使用方法を想定し、「用途のひとつとして土器製作用の製作台」と考えている(山本1998)。

酒呑場遺跡I区では、受け面に「鉍物粒子の欠落」が認められるとし、「粘性のある物体を激しく付けたり離したりする作業を行い、器体表面の粒子が、その物質(粘土)に持っていかれた結果」と保坂氏は推定した(保坂2002)。

稲荷山遺跡では受け面の凹凸部のうち、凸部のみにザラつきがあり、「胎土中に含まれる鉍物粒子が剥き出しになったような状態」と表現されている(工藤2004)。その径は概ね10.7cmの範囲内に収まり、円形で平面をもつもの、との推定から受け面に載せられた物は「土器の底面が最も妥当」との結論に至っている。ただし直接的に受け面上に土器を載せたのか、間接的であったのかはわからないとし、回転

運動による痕跡ではないとしている。

各地の事例には受け面中央を中心にした使用痕をもつ事例が非常に多い。鉍物粒子が抜けた軽度のもの、擦痕が受け面凸部にのみ認められるもの、受け面中央が径10cm程度の円形に窪むほどに著しく認められるもの等がある。使用痕は、胎土が小ブロック状に微細に剥離したようなアバタ状の形跡をもつものが多い。受け面全面に及ぶものは少なく、逆に周縁部のみに認められる例もほとんどない。

受け面に使用痕をもつ割合は、釈迦堂遺跡群では43点中27、酒呑場遺跡I区では10点中5、原町農業高校前遺跡では16点中7、多摩NT遺跡群では18点中6、橋本遺跡では10点中7で、50%近く、あるいはそれ以上に認められる。

中央部分に円形の剥離部分をもつ例に以下がある。

釈迦堂遺跡群SⅢ区	SB34	中央10cm	弱い
	SB48	中央7.5cm	かすか
釈迦堂遺跡群SⅣ区	SB11	中央10cm	
	SB50	16cm	激しい
	SK08	12cm	
	SK178	7cm	
釈迦堂遺跡群NⅣ区	G7	10cm	わずか
	SB03	中央20cm	
	SB65	10cm	
釈迦堂遺跡群SⅤ区	J20	6cm	
	17号住	中央10cm	
酒呑場遺跡I区	捨て場	15cm	
	33号住	中央13cm	
多摩NTNo67		中央10cm	
橋本遺跡	40号住	中央10cm	
	48号住	15cm	顕著
上中丸遺跡	56号住	中央9cm	
田名花ヶ谷戸遺跡	遺構外	中央13cm	きわめて顕著

多くは径10cm程度の使用痕である。土器製作台という仮定で話を進めることが許されるならば、受け面と土器底部には密接な関連が考えられる。ひとつには底径と受け面径の関連性についてであり、縄文中期でも底径の大きさが変化していることから、台形土器の径との対応関係が推測される。

もう一点、土器底面の状況と台形土器の表面の対応についてである。台形土器の上で土器を製作すると、ある程度乾燥するまで台の上に土器を載せたままとなり、土器底部をヘラナデ整形できない場合が多い。大型深鉢では底部の調整は難しく、底部未調整のままの例も推測される。実際、底部に何らかの台のネガ圧痕をもつ事例は多い。底部無文の土器の

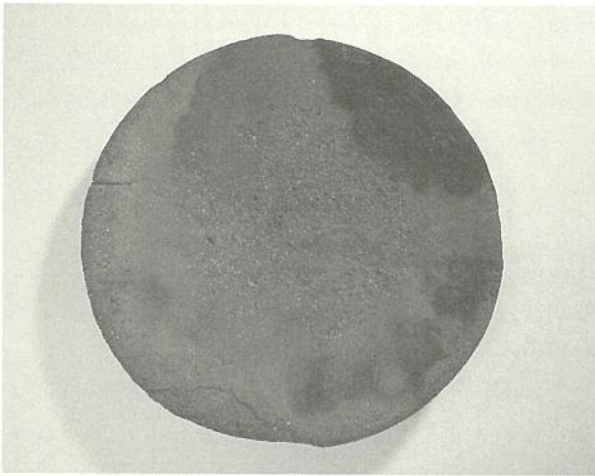


写真1 受け面の使用痕 (釈迦堂遺跡群NIV区SB65)

場合、これまでほとんど顧慮されなかったが、調整、未調整の識別は可能で、未調整の例をよく観察すれば、台形土器等の台の圧痕を観察できる。あばた状使用痕のある台形土器を用いて製作した土器には、そうした圧痕が明瞭に観察されると考えられることから、今後は注意を払っていきたい。

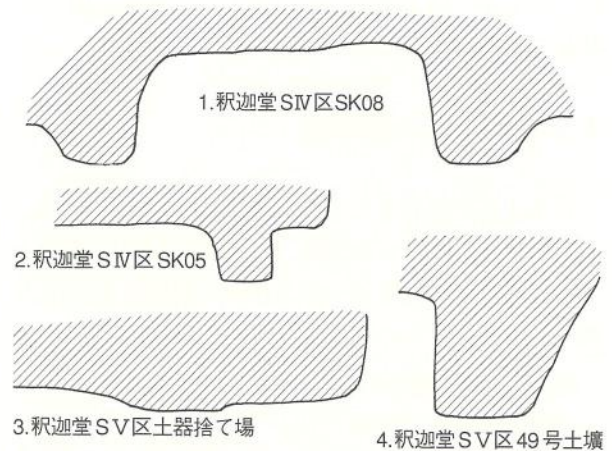
接地面の擦痕 接地面の擦痕については、大正15年、鳥居龍蔵氏により台形土器が初めて報告された時点で、既に指摘された。当初、台形土器は皿形土器の可能性もあるとされたが、脚端部の磨耗の存在から、次第に台としての認識を受けるようになったと考えられる。接地面の擦痕は、それほどこの器種に特徴的な使用痕として目立つ存在であったといえる。

脚部の磨耗については、その度合いがいろいろで、ほとんど見受けられないもの、斜めに片減りするほど使い込んだもの、さらに脚が消滅したものもある。

磨耗が進行した脚部断面は角頭状になるのが通例で、机の上に置いたときに隙間なく接地し、ほぼ平らに摩滅が進むという特徴がある。この使用痕は山梨県内の台形土器に明瞭であるが、各地で普遍的に認められる現象ともいえる。厳密には第3図に示すように、わずかに丸味をもった断面となる。

神谷原遺跡、稲荷山遺跡では円周とほぼ並行した同心円状の擦痕が観察され、回転運動による磨耗と考えられている。高い割合で認められるのが特徴で、多摩NTNo.245遺跡では24点中半数以上の13点、No.72・795・796遺跡では遺存状態不良を除く50点中45点に確認され、「基本的にはその多くは磨耗痕を有す」とされている (丹野1997)。

「片減り」現象 (斜めの傾斜で脚部の磨耗が進行した状況) については、室伏氏が山梨県塩山市町田



第3図 脚端部の断面 (1/2)

遺跡の事例で見出し、製作時の小刻みな反復半回転運動によって生じたものと推測している (室伏氏ご教示)。特に釈迦堂遺跡群出土の台形土器には多くの片減り事例が存在したことから、台形土器に特有の磨耗痕とみなされた。今日では甲府盆地東側から西関東に散見される現象で、中でも釈迦堂遺跡群に顕著な使用痕といえる。八ヶ岳南麓以西にはあまり認められず、地域的な現象として理解できる。

磨耗度の違い、つまり使用頻度、回転回数の違いにより、痕跡がほとんどないものから顕著なものまで様々な使用痕を生じたことが推測される。各遺跡の接地面に使用痕をもつ割合は以下の通りである。

- 釈迦堂遺跡群 38例中37 (僅か-4、顕著-27、片減り30例中8、完全に脚部消失3)
- 酒呑場I地区 10例中6 (僅か-4、やや顕著-1、片減り0)
- 原町農業高校前遺跡 20例中8 (僅か-4、顕著-1、片減り0)
- 多摩NT遺跡群 15例中6例 (僅か-3、顕著-3、片減り0)
- 橋本遺跡 10例中5 (僅か-1、片減り0)
- 田名花ヶ谷戸遺跡 3例中2 (顕著-2、片減り2)

釈迦堂遺跡群における接地面の磨耗は顕著なもの非常に多く、相関して片減り例も多い。磨耗があまり見られない八ヶ岳南麓の酒呑場遺跡、原町農業高校前遺跡では片減り例が皆無となっている。

なお、釈迦堂遺跡群の資料中には脚部が欠けた例があり、激しい使用による欠損の可能性がある。そうした場合、接地面を水平に再調整したうえで使用したことが考えられ、人為的に磨いて再調整したケースも想定される。

粘土状付着物 受け面を中心に側面、裏面に粘土と思われる付着物が認められるもので、色調は黄褐色、灰白色などがあり、薄く付着したものが多い。粘土

状付着物については、以前より観察されてきたことであるが、表立って扱った論考は工藤幸尚氏の論考以外には皆無である。

初めて報告書で報告されたのは相模原市下原遺跡であろうか(岡本1992)。29号住例は受け面から側面にかけて粘土の付着が認められるもので、相模原市立博物館常設展示で観察することができる。

酒呑場I地区の報告中では、資料6に「広範囲に白色粘土と思われるものの付着が観察される」とある(保坂2002)。

稲荷山遺跡の報告で、工藤氏は317号土坑の2点の台形土器受け面に「黄灰褐色の付着物」を確認した(工藤2004)。使用痕と重複する部分に集中的に付着した例と、受け面全体に認められる例で「粘土状付着物」の顕微鏡写真を掲載している。



写真2 粘土付着例(山梨市高畑遺跡例)

粘土状付着物については、ローム的な色調をもつ微細な土壌であることが多く、土器製作時の粘土が付着したものかどうか、認定が難しい。台形土器への粘土付着に関しては、以下のケースが想定される。

- ①覆土が付着した場合
- ②赤彩と同様に何らかの目的で塗布された場合
- ③土器製作に伴い、偶然付着した場合

脆弱な資料の水洗は不十分になりがちなため、①のように土壌が付着したままとなる場合があるが、これは再洗浄によって落ちる。しかし丁寧な洗浄が行われたにも係らず、依然として粘土状付着物がある場合、②あるいは③を想定したい。稲荷山遺跡例のように、擦痕等の使用痕の上に付着したもので、③の可能性が高い。また粘土が付着する部分、しない部分が明瞭に分かれた例では③と考えられる。

粘土状付着物をもつ割合について、限られた観察

データによれば以下の通りである。

釈迦堂遺跡群	44例中19例
酒呑場遺跡I地区(山梨県北巨摩郡長坂町)	10例中7例
原町農業高校前遺跡(山梨県北巨摩郡長坂町)	25例中16例
多摩NT遺跡No67・72・245・300・471・939	18例中9例
橋本遺跡(神奈川県相模原市)	10例中7例

以上のように、各地で約半数程度の資料に粘土状付着物が観察できる。

付着状況には、その付着部位によりいくつかのパターンがある。受け面を中心に脚部側面、鏝裏面、内面にまで及ぶものがあるが、ここでは受け面の状況に絞って分類する。

- ①受け面全体に付着 酒呑場遺跡I区10号住、上中丸遺跡13B号住など
- ②受け面中央付近に付着 釈迦堂遺跡群SIV区SB11、橋本遺跡32号住、上中丸遺跡56号住など
- ③受け面外周に付着 釈迦堂遺跡群NIV区J20、SV15号住、原町農業高校前遺跡35号住、橋本遺跡1号住、上中丸遺跡13B号住など

②では台形土器中央部分に使用痕の形成が進行した事例において、受け面があばた状に荒れた例で土器製作を行った場合に粘土の付着が想定される。稲荷山遺跡例にはそうした状況が観察されている。

③では土器製作時に、粘土の付着した手で台形土器に触れることで生じるものと考えられる。初回の使用実験では、意外にも受け面中央の粘土付着は弱く、周囲にドーナツ状の粘土付着部分を残した(第7図)。ただ受け面中央部の使用痕形成が進行すると、②の状況になり、やがて①のような全面に粘土付着をみると考えられる。こうした使用過程、使用頻度に加え、当時、使用後に台形土器を洗ったかどうかで、付着状況が変化する。

ヒビの形成 台形土器のヒビの意義については、酒呑場遺跡例を観察した保坂康夫氏によって初めて論じられた(保坂2002)。つまり、縦横方向にヒビが入る有脚タイプでは「垂直方向の力での断面疲労による破断の可能性」があり、周縁部に沿って円弧状にヒビが入る円盤タイプは、片面に細かなヒビが集中する特徴がみられることから、「ヒビの細かく入る面を下にして、ヒビが集中する部分に特に力が働くような動作で、(中略)斜め上方から水平に近いような方向で力が働いたもの」で、「粘土をこねる作業に使用されたと考えられる」と推察し、いずれも実験的な検証を要するとした。台形土器に残され

たヒビから機能を解明しようとするもので、新たな視点を開いたといえる。

保坂氏の指摘を受けて工藤幸尚氏も稲荷山例を同様な視点で観察しているが(工藤2004)、2枚重ねで土坑底面に廃棄されたと考えられる稲荷山遺跡の有脚タイプ例では、上方からの土圧などの要因で生じたヒビとみなし、使用痕以外に遺物の廃棄・埋没過程を視野に加えた検討の必要性を指摘している。

台形土器に通常の土器とは異なった細かなヒビが生じた事例が目立つのは確かで、例えば釈迦堂遺跡群SIV区E11のB類では、受け面に同心円状のヒビが入り、裏面は完形にも係らず、鏝部と脚部を除き、脆弱化して取り上げ不能という特異な遺存状況を呈している。そのほか卑近な事例では山梨市高畑遺跡8号竪穴出土例(写真3、第6図5)も受け面中央を中心に細かな割れが入り、取り上げ、復元に大変な苦勞をした経験がある。粘土接合帯部分で分離した帯状の割れ目やヒビとは明らかに異なっている。

土器製作台として仮定した場合、製作者が働きかける台形土器の動きとして、以下の諸運動があげられる。

①台形土器の移動の際に、縁などをつかんで台形土器を運ぶ。

②製作中の土器を移動するために、台形土器の縁をつまんで持ち上げる。あるいは孔に指を入れて持ち上げる。

③施文・整形時に台形土器を回転させるため、台形土器の縁を持って回転する。あるいは孔に指を入れて回転する。

④製作時の土器の重みにより、受け面中央に垂直方向の自重がかかる。



写真3 受け面のヒビ (山梨市高畑遺跡例)

すべてのヒビと土器に対する働きかけの関連性が密接なものかどうかは不明である。しかし内部に蓄積された疲労が、埋没過程でヒビとして表面化したとする仮説は十分考えられる。

ここでは、④について同心円状のヒビ形成を想定するほか、②・③については周縁部に沿ったヒビまたは割れの発生を推測しておく。

使用に伴う疲労の結果生じたと考えられるヒビが、土器の機能を示唆する可能性があるともみなした保坂氏の視点は卓見といえる。今後、台形土器の観察ポイントとして加えていくべきであろう。

V. 台形土器の出土状況

台形土器は廃棄の過程で竪穴内、土器捨て場、遺構外から出土する例が多いほか、土坑出土例も散見される。完形品での遺存状況が多いほか、2点以上の完形品が同一竪穴や土坑内から出土した事例、粘土塊との伴出例があるほか、ただ1例ではあるが、土器乾燥中の状況を示すと考えられる多摩NTNo245遺跡51号住例がある。

竪穴内の出土例 竪穴住居址内の床面から完形もしくは完形に近い形で出土する例がある。土器製作との関連で注目すべき例の多摩NTNo245遺跡51号住では、竪穴東壁近くの粘土ブロック中からパックされたように台形土器が床面上に正位で、その周囲に未焼成土器(曾利Ⅱ式期)が倒壊したような状況で出土した。報告者の山本氏は竪穴の一角が土器製作に関わる貯蔵、あるいは作業場であったと推定し、竪穴床面で土器を乾燥中、粘土ブロックが崩壊したのではないかと考えた。未焼成土器が台形土器に伴うものか否か確実ではないものの、両者の出土位置から山本氏の見解に同意したい。未焼成土器の破片は施文が終了していることから、土器は乾燥中であった、と考えるのが自然で、竪穴内の台形土器の上に乾燥中の1個の土器が置かれたという情景が想像できる。したがって台形土器の一機能として、土器乾燥の台として用いられたことが本事例から理解される。ただしこの場合、竪穴内が土器製作の場であったかどうかはわからない。竪穴中に粘土ブロックが保管されていたことから考えると、上屋が存在した状態であった可能性が高いが、夏季に竪穴を壁のない作業場として、土器作り等に利用していた可能性もある。上屋がある状態では暗い室内で土器作りは

不可能ではないか。

長野県北大出遺跡では鳥居龍蔵氏の調査で、竪穴の柱穴脇、床面に逆位で「水平に存した」状態で一部を欠くB類が発見された(鳥居1926)。埼玉県坂東山遺跡16号住(加曾利EⅢ式期)では覆土中から遺物がほとんどなかったにも関わらず、「住居址北東部に床面密着で」出土した(谷井1974)。川崎市西菅遺跡遺跡1号住(加曾利EⅢ)ではC類が「柱穴と北側貯蔵穴との間の床面から」出土した(高津図書館1974)。八王子市中原遺跡C号住(勝坂Ⅲ式期)ではB類が「西隅壁に近くほとんど完形で平らに置かれて出土し」、床面から正位で出土したようである(渡辺1961)。韮崎市坂井遺跡ハ号住(曾利Ⅲ式期)では、柱穴脇から「水平に置かれたまま」、「床面に使用したままの姿勢で」完形のB類が出土している。同住居内では土器の中から粘土塊が「当時使用されたままの状態が残っていた」。以上のほか、群馬県大平台遺跡2号住、神奈川県小丸遺跡6号住、長野県中川村上ノ原遺跡10号住等で完形品が床面から出土した事例がある。このように、覆土に廃棄された土器は基本的に破損品であるのに対し、台形土器は床面から完形で出土する事例が比較的多い。

竪穴内からは複数の完形品が出土する事例が目立つ。酒呑場遺跡I区33号住では、2点の完形の台形土器が「並んで、床面よりやや浮いた状態で出土」した。同10号住では「南壁に立てかけた状態で」生粘土塊に隣り合ってA類の完形品2点が出土した。

釈迦堂遺跡群SⅢ区SB34(曾利Ⅰ式期)ではB類3点が完全な状態で、竪穴南東側の一角に近い位置から出土した。また同SB36(井戸尻式期)では2点が出土している。ほかに未報告資料であるが、山梨県明野村平林遺跡42号住(曾利Ⅰ古式期)では竪穴内の一角から3点の台形土器の完形品が出土した事例がある(佐野隆氏ご教示)。

栃木県宇都宮市上欠遺跡53号住(加曾利EⅢ式期)では西側壁際から3点のC類の完形品が伏せた状態で出土し、埼玉県浦和市原山東原遺跡1号住(加曾利E3式期)ではC類の完形品2点、八王子市小比企向原遺跡J106号住(井戸尻式期)ではC類の完形品2点が出土した。相模原市橋本遺跡SI01では近接してC類の完形品2点がともに逆位で出土し(大貫1987)、両者とも受け面縁部にわずかに炭化した網代が付着していたが、この解釈としては、網代をのせた状態で2次焼成を受けた結果と考えられるもの

の、台形土器が竪穴床面の網代の上に逆位で置かれて保管されていた状態で火災にあった、と考えるのが妥当であろう。

土坑・ピット中からの出土例 竪穴内土坑、ピット中の例として、原町農業高校前遺跡では43号住内土坑からの出土状況が特異である(正木2002)。43号住(井戸尻～曾利Ⅰ古式期)のピット13からはA類、ピット15内からはB類がそれぞれ石皿を伴って出土したという。また90号住内の土坑中からは逆位でB類の完形品が出土している。

酒呑場遺跡I地区10号住では南壁際小ピット中から生粘土塊とともにD類が出土した(保坂2002)。

釈迦堂遺跡群SⅣ区SB83は火災住居で、南壁近くのピット中、覆土中位から逆位のB類完形品1点が出土している(小野1987)。

遺構外の土坑例としては、釈迦堂遺跡群SⅢ区SK51からは土坑覆土中から、B類と曾利Ⅱ式土器深鉢の完形品が近い位置で出土した。そのほか土坑から完形の台形土器が出土した例にはSⅣ区SK08などがある(小野1987)。

千葉県稲荷山遺跡317号土坑(加曾利E式期)は62×40cm、深さ76cmの一部袋状を呈した土坑である。底面から僅かに浮いて完形の台形土器が2点、下向きに重ねたように出土し、2点1組とした土坑内廃棄の事例として理解されている(工藤2004)。

竪穴内、あるいは土坑中から2点の台形土器が伴出した事例について、工藤幸尚氏は「2点一組という単位が台形土器の何らかの性格を反映するものではないか」と推察し「台形土器の用途とも関係を有することは間違いないだろう」と述べている(工藤2004)。山梨市清水田遺跡では、発掘資料ではないが2枚(A・B類)の台形土器が重なって出土した例もある(第4図)。ただ竪穴出土資料として3点セットも増加しているので、現時点ではあえて2点1組にはこだわる必要はなからう。いずれにせよ、竪穴内からは廃棄された状態で欠損した土器が出土する中で、無傷の台形土器が竪穴床面から出土するという現象に加え、2～3枚の台形土器がまとまって、あるいは重ねたように出土する状況については、廃棄という観点をもつ必要があるのは当然であるが、むしろ竪穴内における土器の保管状況、使用状況を示す事例として積極的に理解できる可能性がある。

2あるいは3点という数については、1人が使う

台形土器は1日の作業で1個と仮定するならば、2～3人用の土器といえる。したがって仮に土器製作台と仮定すれば、堅穴は土器製作に関する道具類をまとめて保管していた場であったか、あるいはその家が家族単位で土器製作にあたる、半ば専門的な工人の家であった等の想像ができる。

近年の調査事例が蓄積される中で注目すべきなのは生粘土との共伴例である。多摩NTNa245遺跡をはじめ酒呑場遺跡でのあり方は台形土器と生粘土が緊密な関連性をもつものであったことを示唆する。また堅穴内ピット(土坑)の台形土器については、日常的には使わない道具を床下ピットに保管した状態であったと想像するのがよいだろう。今日の我々もそうであるように、関連する作業の道具や素材、材料をいっしょに保管することは普通であることから、酒呑場遺跡の事例は台形土器が粘土に関した作業に関連した道具であることを示唆している。

VI. 孔

孔に注目して考察したのは室伏徹氏であり、孔の特徴として次の5点を挙げている(室伏1976)。

1. 孔の形は丸か楕円形。
2. 孔の外縁は丁寧な丸められている。
3. 孔の大きさは指が1本入るもの、数本入るものがある。
4. 孔の配置には規則性があり、単位1孔ないし2孔として偶数配置(2・4・6)、奇数配置(1・3・5)をする。
5. 孔は一定の高さで配置する。

孔は台形土器を動かすための「受動具」で、2孔単位制が勝坂～加曾利E前半に、1孔単位制が中期後半に多いことを指摘した。そして土器の縦分画が盛んに行われた時期と一致するように存在することから、孔配置が文様施文時の分度器のような役割を果たしたことを推測している。その後、孔は「両手で少しずつ回す程度の動き」を繰り返すような、鈍い回転が土器のナデ調整や施文工程にふさわしい、と述べるとともに、両手で動かすのなら偶数配置でよいのに、孔に奇数配置があるのは文様の割付具としての役割があったからではないかと推測している(室伏2002)。

多摩NTNa72・795・796遺跡では2孔2単位、1孔4単位は2・4単位の大区画分割線の基準に、6

単位例は3・6単位分割に利用できることが推定されている(丹野1997)。

阿部氏は孔配置に規格制の弱いものが想定されることから、実的な意味合いよりも装飾性、透かし孔的な要素がある可能性を述べている(阿部2001)。

孔は台形土器当初からはなく、藤内式期(勝坂2式期)から出現する。中期前半に多く存在するA類では孔がないものを主体とするが、葦崎市坂井遺跡例には1例のみ側面に孔をもつタイプがある。B類は孔をもつものが大半であるが、ないものも多い。鐳をつかんで回すのであれば、孔がなくてもよいのであろう。C類ではほとんどの事例に存在するが、とくに中期後半の脚が開くタイプには、径の大きな孔や楕円形の孔が設けられることが多い。土器をのせた状態で台形土器ごと持ち上げようとする場合には、孔がないときわめて持ちにくい。回す、という意味合いとともに、持ち上げるために指をかけてつかむという実的な機能を果たすため、孔の径がより大きくなったのであろう。中期後半に鐳がなくなったことで、鐳の果たしていた役割を孔が果たしたといえる。ただし長野県伊那谷地域には孔のないC類が分布する。

文様施文時の割付に関しては、台形土器の孔の位置をもとに口縁から胴部文様の縦位基準線を設定するのは難しいことが、製作実験を行うとわかる。口縁を上から見るようにして単位を決め、上から下へ向かって縦に基準線を引きおろすのが普通で、文様割付も容易である。孔の配置が厳密でないこと、受け面上に孔配置に対応する基準線がないことから、文様割付の可能性はないと考えておきたい。

VII. 台形土器の文様・塗彩

台形土器の裏面の文様 台形土器には受け面に明らかな文様をもつものはない。施文部位としては脚部側面の孔周囲や鐳側面であるが、ここでは内面、受け面の裏面に沈線文をもつ事例を取り上げたい。本来、裏面は台形土器の使用時には見ることができないことから、通常文様とは異なり、土器の装飾として効果的ではないのは明らかである。施文された文様をみると、一般的な土器文様とは異質で、記号的、あるいはマジカルな文様である。福島県から長野県まで、土器型式分布圏を越えた広範囲で類似した文様が分布する。裏面に文様をもつ例を以下に挙

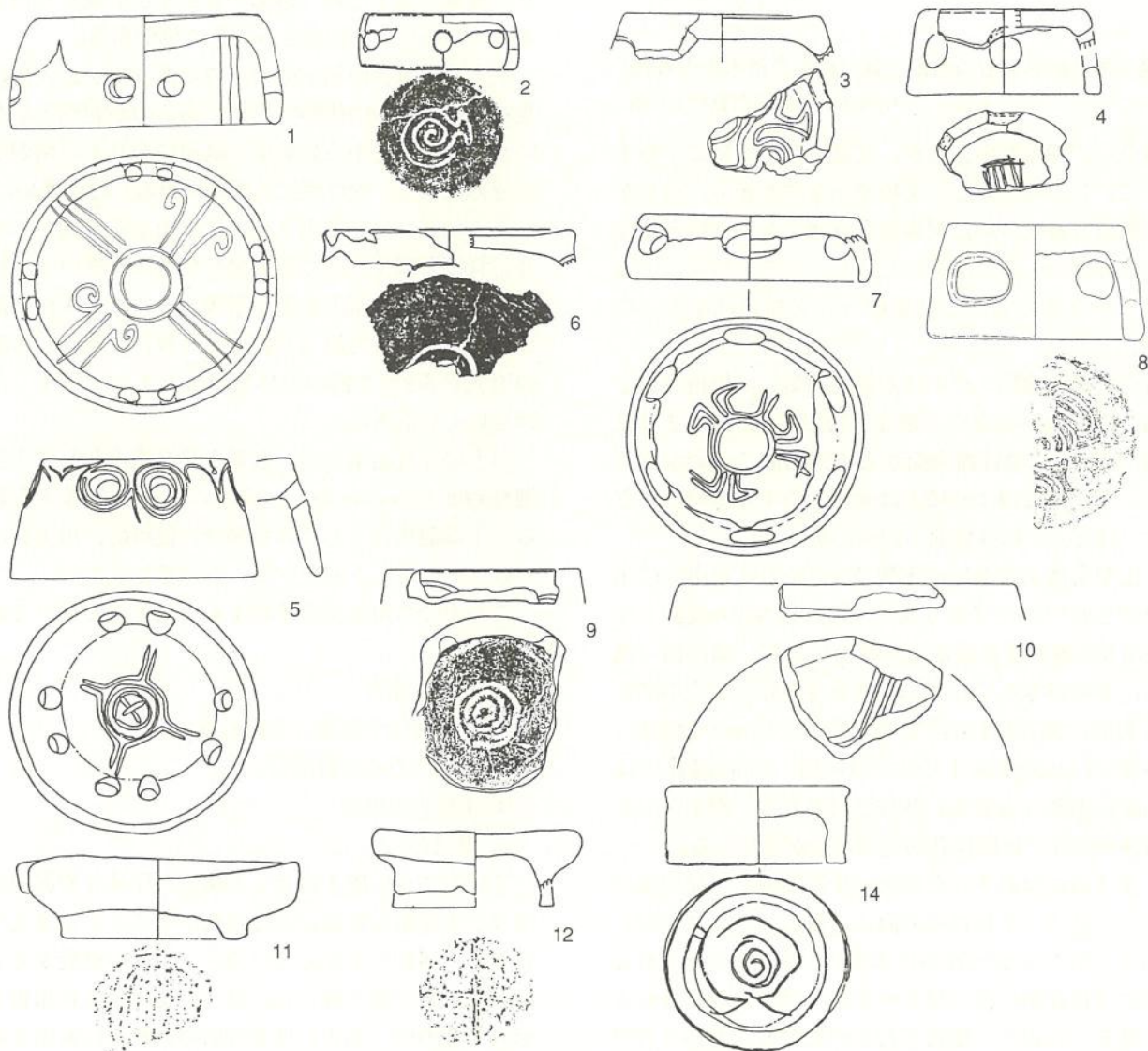
げる (第4図)。

所在地	遺跡名	形態	文様
1 福島県河沼郡千咲村	袋原遺跡	C類	円文
2 栃木県茂木町	桧ノ木遺跡B513号土坑	加曾利E I C類	渦文
3 千葉県市川市	向台貝塚	加曾利E I~II C類	不明沈線文
4 千葉県横芝町	東長山野遺跡	C類	四角状
5 東京都	多摩NT遺跡No.300	C類	円文
6 東京都	多摩NTNo.9遺跡	C類	円文
7 東京都府中市	飛田給遺跡SI7号住	加曾利E III C類	円文
8 東京都調布市	原山遺跡SI35	加曾利E II C類	渦文?
9 神奈川県	川尻中村遺跡67号住	C類	円文
10	同	遺構外 C類	十?

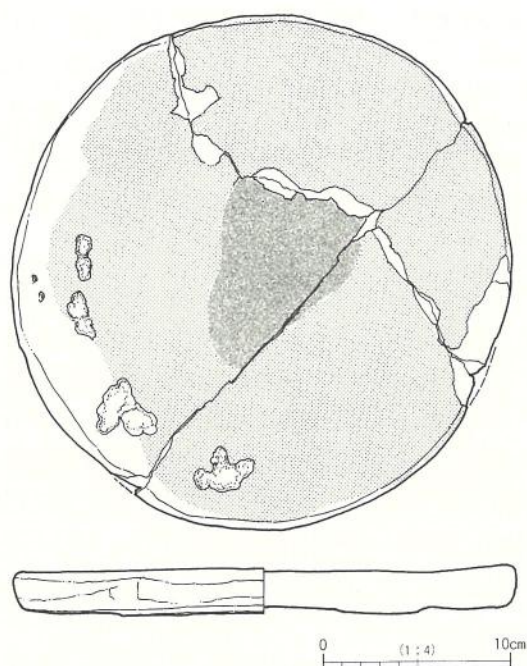
11 山梨県勝沼・一宮町	釈迦堂遺跡群N III区	B類	平行5本線
12	同SIV区	B類	十
13 山梨県長坂町	酒呑場遺跡C区4号住	C類?	平行4本線
14 長野県南箕輪村	久保上ノ平遺跡33号住	唐草文 I C類	渦文

以上12例のみであるが、加曾利E I 式期を中心に広範囲に散見される。器形はC類を主とし、文様としては渦または円を中心に1ないし4箇所には張り出した文様をもつ。釈迦堂遺跡群SIV区例と川尻中村例は類似し、また釈迦堂遺跡N III区と酒呑場遺跡例も類似文様である。これらには何らかの共通した意識が感じられる。

全く違った個性的な文様であれば、所有者への帰



第4図 裏面の文様 (文中の番号と一致) (1/6)



第5図 赤彩をもつ台形土器（山梨市清水田遺跡例）
中央赤彩、周辺白色粘土附着

属を示す印ともいえるが、文様をもつ例はごくわずかで、しかも類似した文様であることから、何らかの用途と結びついた呪術的な意味をもつ文様と想像しておきたい。想像をたくましくするならば、土器作りがうまくいくことを願った文様ではなかったか。

台形土器の塗彩 そのほか赤色あるいは黒色塗彩を施したものが目立つ。多摩NT遺跡No.46遺跡2号住例（C類）は受け面全面から脚部側面に赤彩が残るといだが、このように受け面に塗彩する事例は少なく、ほとんどは脚側面、内面である。

山梨市清水田遺跡の事例ではA類の片面中央に赤彩がされていた（第5図）。多摩NTNo.191遺跡1号住ではB類の鏝裏面から脚側面に黒彩、脚内面（裏面）が赤彩されていた。釈迦堂遺跡群NIV区SB65では裏面、酒呑場I10号住では外面に12cmの範囲に、多摩NTNo.939遺跡1号住では内面、No.300遺跡では内面に赤彩（未報告）された例がある。栃木県上欠遺跡53号住では脚部孔周辺に赤彩が遺存する。

受け面に塗彩された事例は少ないので、使用面はあえて避け、それ以外の面に塗彩していたことがわかる（第5図は例外的な事例）。祭祀用の台であるならば視覚的に目に付きやすい受け面に塗彩されることが考えられるが、塗彩されない例が多いという点が台形土器の機能を暗示している。

VIII. 台形土器の用途について

受け面は厚く作られ、表面は丁寧な調整が行われる。受け面の磨耗痕として、表面の鉱物粒子の脱落が見られることから、受け面上で粘着性の高いものを繰り返し押し付けたような状況が指摘された。さらに中心部分を中心に受け面の表面が擦れを生じるような、例えば平らなものを受け面上で回転させるなどの動きも想定されている。その範囲は使用痕の進んだものでは直径10cm程度の円形を呈す。また受け面の同心円状のヒビの形成も特徴的で、受け面が使用過程で受けた疲労によるものと考えられる。

接地面の磨耗痕は、断面角頭状で平らに進行することが特徴で、遺跡によっては傾斜するほどに片減りが極端に進んだ例、脚部がほとんど消滅した例があり、回転による擦痕と判明した例がある。

粘土状附着物が粘土そのものであるのか、表面の化粧がけのための塗彩の一種であるのか判然としないが、受け面を中心に側面、裏面にも及んだ例が多数認められる。受け面には周縁に残るものが多い。

出土状況では生粘土とともに出土する事例がみられ、特に多摩NTNo.245遺跡51号住では乾燥中の未焼成土器との相伴状況を示す事例であった。床面に置かれたようにして出土したという報告も多い。1軒の竪穴から2～3個の完形品がまとまって出土した例もいくつかある。

以上の分析結果から、台形土器の用途として土器製作台が最もふさわしいのではないかと考えられる。土器製作台としてみた場合、使用痕、出土状況の観点から最も矛盾が少ないからである。

これまでの用途説を整理すると以下のとおりである。

- ① 土器製作台
- ② 有孔鏝付土器等、土器の置き台
- ③ 祭祀のための供献台
- ④ 土器の焼成台
- ⑤ 調理台

②③のように置き台とした場合、片減りや脚の消滅などの極端な接地面の使用痕が生じるとは考えられない。回転作業を伴う作業台としての機能が考えられる。②の置き台とした場合、受け面に使用痕を形成するのか、あるいは受け面の磨耗痕に対応するような底面の磨耗が有孔鏝付土器に存在するのか、

きわめて疑問である。有孔罽付土器と組み合わせよう
な出土状況もない。③の可能性として赤彩の存在が
あるが、赤彩が確認される事例のほとんどは裏面・
側面の塗彩であり、受け面を避ける傾向がある。また
具体的に何を載せたのか。釣手土器も候補のひとつ
であろうが、時期的に台形土器が先行すること、
有孔罽付土器同様に両者の共伴例はないことから否
定される。④については台形土器に2次焼成を受け
た痕跡をもつ例の存在から生じた説で、台形土器を
土器製作台として使用する過程の中で土器焼成台に
も利用した、という可能性は残されるが、必ず2次
焼成を受けているわけでもないので本来的な姿とは
考えられない。⑤の説では接地面に使用痕が形成さ
れるという現象が説明できない。

このように①の土器製作台説が有力とはいえ、い
くつかの疑問点がある。

- ①台形土器の出土量が一般的に少ないのはなぜ
か。特に東北地方をはじめとする周辺地域で非
常に少ない。
- ②受け面がわずかに窪むものが多いが、土器底面
はそうっていない。
- ③赤色塗彩されるのはなぜか。
- ④片減りしたものでは受け面が傾斜し、土器製作
には都合が悪い。また片減り現象は土器製作で
生じうるか。
- ⑤地面で使用したとき、接地面が断面角頭状に平
らに磨耗するだろうか。

これらの問題点について、実験結果を加えながら
考えてみたい。製作実験には田中洋二郎氏の実験成
果と筆者が別に2度にわたり実施した成果がある。

①の出土点数については、例えば非常に多いとさ
れる釈迦堂遺跡群でさえ、中期の膨大な出土土器を
果たして200点程度の台形土器で製作できたのだら
うか、という疑問点が指摘される。東北地方のよう
に1遺跡1点程度の出土量では、土器製作台とする
には量的に少なすぎる、と考えるのは自然であろう。
この点に関しては、台形土器の代用となる製作台が、
周辺地域では別に存在したものと考えておく。特に
九州地方で出土するクジラの脊椎とその圧痕をもつ
土器の存在は、土器製作に台が用いられたことを明
瞭に物語っている。したがって台形土器の多寡は、
台形土器を積極的に利用した地域と、そうでない地
域の違いではないだろうか。釈迦堂遺跡群にあって
も代用品が存在した可能性があるが、台形土器を2

個、3個保有する堅穴があるように、専門性を帯び
たメンバーによる分業的なあり方が出現し、台形土
器の使用が専門的に行われたのではないかと想像し
ておきたい。果たして年間、いくつくらいの土器が
製作されたのか、どの程度の頻度で土器作りが行わ
れたのかかわからないし、台形土器が年間どのくらい
稼動したのか不明な中で、1集落の台形土器の数量
について評価することは、あまりにも難しい。

②の受け面のくぼみに関しては、製作途中の土器
が受け面から分離するまで乾燥した段階では、土器
底部が下げ底状になってしまうはずだが、そのよう
な例は少なく、むしろ土器には上げ底状の底部が多
いのはなぜか、という疑問である。これは後述する
田中氏の製作実験でも明らかにされているが、台形
土器製作時点で円盤下に脚をつけて乾燥させると自
然に受け面が下がるため、意図的なものではない。
台形土器の上で製作中の土器を載せたまま放置する
と、乾燥が完全に進んだ段階では確かに下がった底
部となるが、乾燥がある程度進んで底部が受け面か
ら分離した段階で平らな面に置き直すと、平坦に補
正される。

③については不明である。ただ縄文中期では赤彩
が土偶や有孔罽付土器、浅鉢内面の文様として塗彩
されているので、土器製作台とするならば、裏面の
文様と同様に、よい土器の製作を願い、呪術性をこ
めるために台形土器に塗彩したのではないか。塗彩
そのものに機能面で実用性があったとは考えにくい。

④に関しては、水平面を確保する必要性から生ま
れた台形土器であるならば、傾斜した受け面では確
かに不都合といえる。あまりにも傾斜した土器は使
用に耐えなかったと考えられるので、破損していな
くとも廃棄に至ったと考えられるが、地面に台形土
器を設置する際に、受け面が水平になるように微調
整して水平面を確保した上で使用したのであろう。

片減り現象についての実験成果は得られていない
が、利き手側を反復回転するように強く動かすこと
によって、片減り現象が生じたのであろう。あるいは
製作中の土器が受け面の中心からずれて作られた
場合に片側に土器の重みが一方的にかかり、片減り
現象が起きる可能性も考えられる。

断面角頭状に水平になるのは、田中氏の実験でコ
ンパネのような板の上で製作したときに同じような
使用痕が形成されることを明らかにしている。筆者
の実験では、土の上で同じような使用痕が形成され

るかどうかを明らかにするために、地面で成形を行った。台形土器を動かす回数の違いによって、使用痕の度合いは異なることが考えられるが、1回の土器作りによって、接地面のうち凸部に軽い同心円状擦痕の形成を確認することができた。土間のように堅く叩き占めた地面の上で行ったなら、使用痕の形成はより深いと想定される。また2回、3回と製作回数を増やしていけば、当然ながら使用痕はより進行するであろう。断面角頭状で水平になるかどうか、については、脚部全体に平均的に力がかかることから、接地面全体が均一に平坦になり、やがて水平に磨耗していくことが想定される。極端な状況を想定するならば、田中氏の実験のように、平坦な板の上で使用した現象と同じ結果となるだろう。地面で使用する地面だから断面が丸くなるのではなく、わずかに丸味を帯びた角頭状になると考えられる。

ところで、台形土器は文様施文時に有効と推測されたが、実際に地面に置いたままの状態で行うことは非常に困難であることが使用実験でわかった。とくに小～中型土器で底部付近まで横帯文がつく新道式土器では難しく、施文段階では目線と同じ高さになるように、小型の土器ではテーブル等の上に移動した可能性が考えられた。中期後半の土器では、胴下半が底部に向かって小さくすぼまる、いわゆるキャリパー形の器形となり、胴下半を縦位条線、あるいは縄文のみとするようになることから、地面に置いたままでも可能であったかと思われる。

台形土器が製作台であったならば、その消長が土器の文様帯や器形の変化と大きく関連するのではないか、という推測ができる。

IX. 縄文土器の底部との比較

縄文中期前半と後半の土器で大きく違うのは器形と底径の大きさである。中期前半では比較的底部が大きく、円筒形に立ち上がる器形で、文様帯は横帯文を用い、底部近くにも横帯文を配置する。中期後半になると文様帯は口縁部に集約され、以下を条線、縄文等の地文とし、胴部中ほどを膨らみのピークとして以下底部に向かって小さくすぼまる器形で、底部は概して小さい。山梨県域の分析では、五領ヶ台～猪沢式期以降、一段と小さくなる(第6図)。

また底部圧痕に注目すると、中期初頭以来、曾利

Ⅱ式期まではほとんど網代痕は存在しないが、曾利Ⅳ式期以降多く目立つ。台形土器の消長と非常に良く連動している。

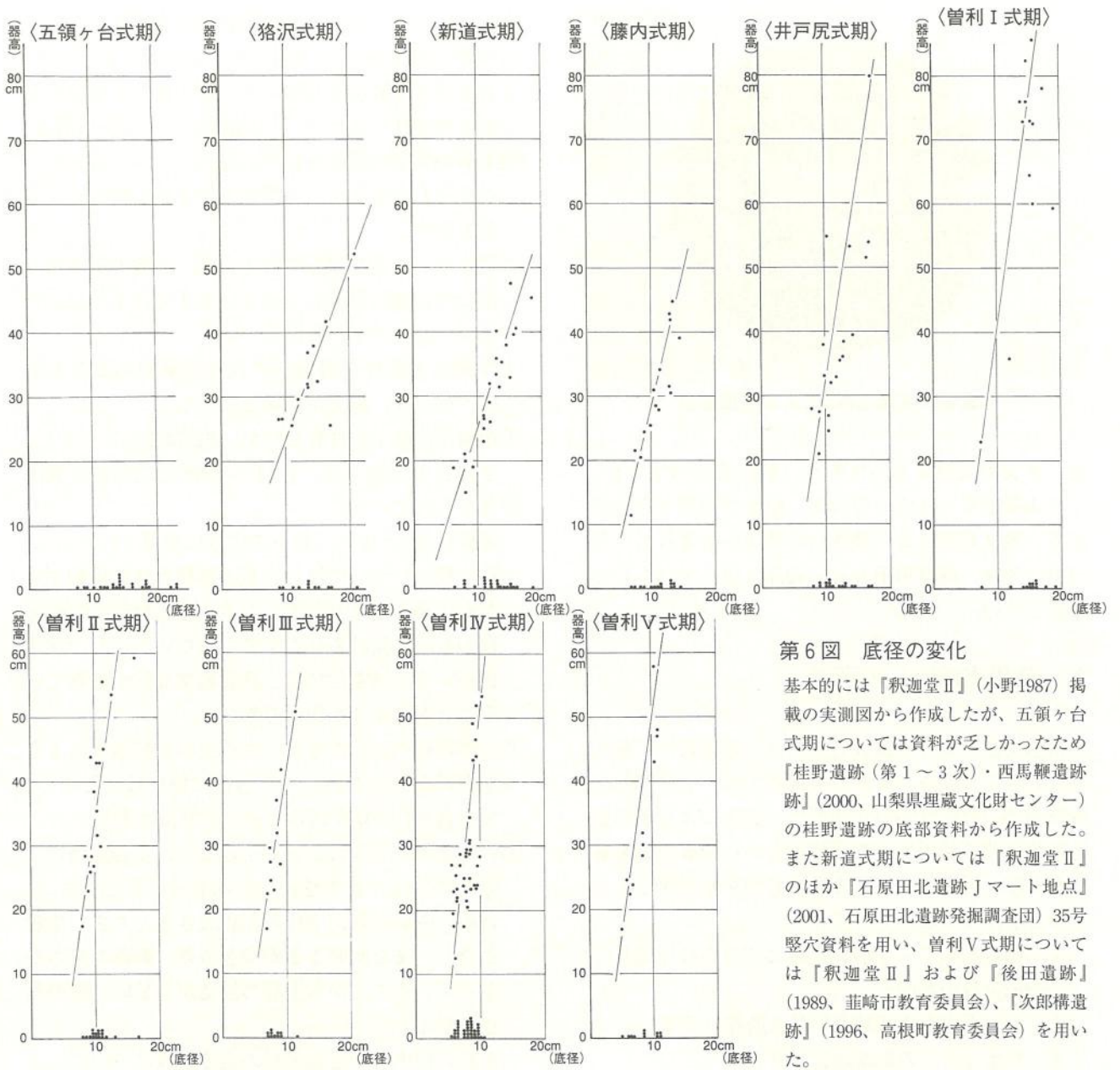
網代痕の出現率についてはデータがないが、山梨県内の3遺跡で縄文中期土器の底部に網代痕を残す資料を集成しておく。

遺跡名	所在地	遺構名・番号(時期)
石之坪(東)	斐崎市	23号住2(曾利Ⅳa) 23号住4(曾利Ⅳa)
		49号住1(曾利Ⅳa)
石之坪(西)	斐崎市	12号住3(曾利Ⅳb) 13号住20(曾利Ⅱb) 38号住2(曾利Ⅳ) 61号住1(時期不明)
		81号住3(曾利Ⅳb) 103号住4(曾利Ⅱ?) 106号住1(時期不明)
		164号住1(曾利Ⅳ) 165号住23(曾利Ⅳb)
		180号住2(曾利Ⅲb?) 191-SD2-1(曾利Ⅳa) 25G-SU1-1(曾利Ⅳa) 33M-SD1-1(曾利Ⅳa)
社口	高根町	34号住15(中期末?) 9号住3(曾利Ⅳa) 9号住6(曾利Ⅳb) 31号住39(曾利?)
上ノ原	須玉町	C49号住8(曾利Ⅴa) C79号土坑(加曾利Ⅳ、曾利Ⅴc並行) C101号土坑3(曾利Ⅴc?) C136号土坑1(曾利Ⅴa?) C180号土坑5(曾利Ⅴa) C197号土坑12(曾利Ⅴc?) C206号土坑1(曾利Ⅴa) C322号土坑1(曾利Ⅴc) C463号土坑1(曾利Ⅳc?) C620号土坑2(曾利Ⅴa?) C4号埋設1(曾利Ⅴb) C5号埋設1(曾利Ⅳb) C6号埋設2(曾利Ⅴ?) C遺構外22(曾利Ⅴb) C遺構外45(加曾利Ⅳ)

実態としての割合を正確に出すことはできないが、山梨県域では曾利Ⅳ式期以降、網代痕の出現率が高まることがわかる。上記のほか、釈迦堂遺跡群では曾利Ⅳa～Ⅴ式期に網代痕があるほか、木葉痕の存在も1例確認した。管見では曾利Ⅳ～Ⅴ式期で半数近くと考えているが、底部無文例では底部をなでた調整状況が多い。つまり網代痕など底部圧痕をナデ消したような状況が伺える。中期前半には同じ底部無文であっても底部に細かなシワ状圧痕を残すものがあることから、製作台の圧痕を残すと考えられる。製作実験では、台形土器の上で作った土器底部に、同様な特有のシワ状圧痕を認められた。

台形土器では、受け面から底部を強制的に分離しない限り、乾燥がある程度進むまで受け面から土器が分離しにくいことから、底部には受け面の圧痕を残す。その時点で底面のナデ調整を行うものも多いが、あえて底面を調整する必要性もなかったとみえ、未調整のものもある。とくに大型深鉢では調整自体が難しく、できなかった場合があると考えられる。

底部の状況については、従来、木葉痕、網代痕といった明確な圧痕資料についてのみ注目されてきた



第6図 底径の変化

基本的には『釈迦堂Ⅱ』(小野1987)掲載の実測図から作成したが、五領ヶ台式期については資料が乏しかったため『桂野遺跡(第1～3次)・西馬鞭遺跡』(2000、山梨県埋蔵文化財センター)の桂野遺跡の底部資料から作成した。また新道式期については『釈迦堂Ⅱ』のほか『石原田北遺跡』マート地点』(2001、石原田北遺跡発掘調査団)35号竪穴資料を用い、曾利Ⅴ式期については『釈迦堂Ⅱ』および『後田遺跡』(1989、韮崎市教育委員会)、『次郎構遺跡』(1996、高根町教育委員会)を用いた。



写真4 底部圧痕例(山梨市高畑遺跡例)

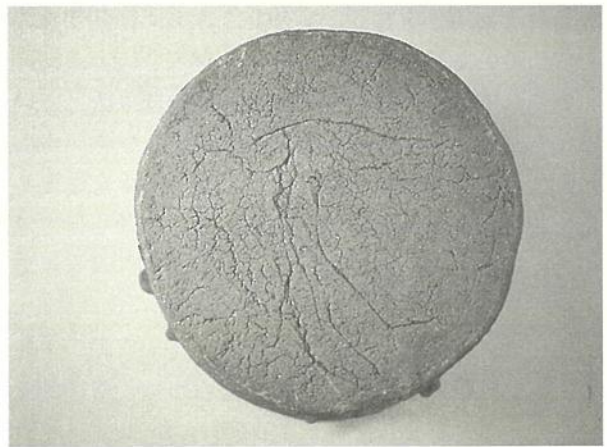


写真5 実験土器bによる底部圧痕

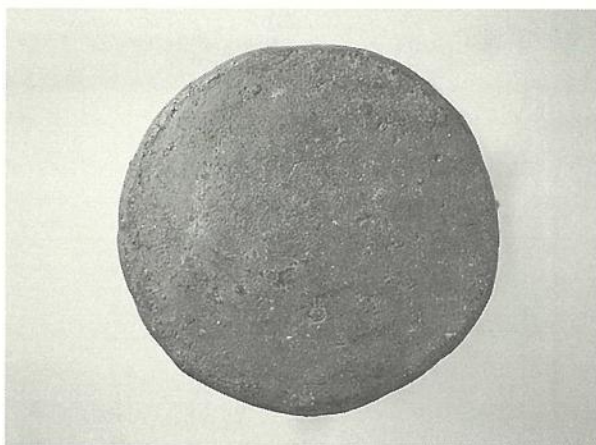


写真6 実験土器dによる底部圧痕

が、無文の底部であってもシワ状圧痕を残すのか、ナデ調整が行われているのか、厳密な観察が必要である。無文底部にこそ製作台の情報が含まれているので、今後、観察事項として底部に注目すべき点を提言したい。

X. 使用実験からの所見

台形土器の製作実験の必要性は、保坂氏や工藤氏らによって指摘されており（保坂2002、工藤2004）、台形土器の機能解明のうへでは、実験による使用痕と遺物に残る使用痕との比較、という手順が最も有効な手段と考えられる。実験の目的を整理すると以下のとおりになる。

1. 脚端部の平らな磨耗痕および斜めの片減りの形成過程の解明。
2. 台面上中央の磨耗痕の形成過程の解明。
3. 粘土付着痕の形成過程の解明。

いくつかのタイプの台形土器を製作、準備し、それぞれ土器製作を複数回実施したうえで、使用痕の形成について記録化していくのが理想と考えられる。

ところで、茅野市で土器製作実験を繰り返している田中洋二郎氏は2002年シンポに参加した後、早速、台形土器による製作実験を行い、レポートをまとめた。個人的なプリントではあるが、先駆的な研究成果として重要であることから、田中氏の許可を得て引用、要約させていただく。

田中氏の実験は台形土器の製作・焼成実験から始まる。先述したように受け面が窪むのは、意図的ではなく、自然に起こりうることを明らかにしている。

製作したB類を用いて、2回の土器製作実験が行

われている。1回目では作業台の上を地面にみたくて細かい砂を敷いて使用したところ、「ゴリゴリ」と音を立てて脚部が摩滅した。その後、砂を除去して板上で製作を続けた。その結果、いくつかの利点、使用痕の発生が観察されている。

- ①台形土器は製作中の土器底部の水分を吸収し、硬化を促す。
- ②製作中の土器を回転させるため、円盤の張り出し部はつかむのに適しており、両手で回すと思いのほかスムーズで、使いやすい。
- ③作業台と製作土器底部の間に間隔があることから、仕上げ、施文が容易となった。
- ④台面には粘土が付着したが、擦痕は生じていない。

2回目の実験では、1回目に摩滅した部分に光沢が発生したという。

実験結果について、以下のように整理されている。

- ①孔の機能については、台形土器製作時に反転するための手がかりとして、あるいは乾燥時の乾燥促進のために開けられたものではないかとし、室伏氏がいう文様割付には、孔と施文部位が離れていることからうまく利用できない。
- ②土器製作実験によると、台形土器を破損するような力は発生しない。また台面に擦痕は生じない。作業台面に砂粒があると脚部の摩滅は著しい。
- ④台形土器を製作台として用いると、土器底面の水分を吸収し、製作時間の短縮を助けるとともに、台面の円形が底部を作る際の大きさ、丸さの規範となる。また回すことができる点、脚部の高さが穿っていることから土器の施文がし易い、等の利点がある。

さらに田中氏は台形土器の変遷過程について、土器製作台としての視点から4段階の変遷を推測した。

I段階—転用土器底部を製作台として使用する。

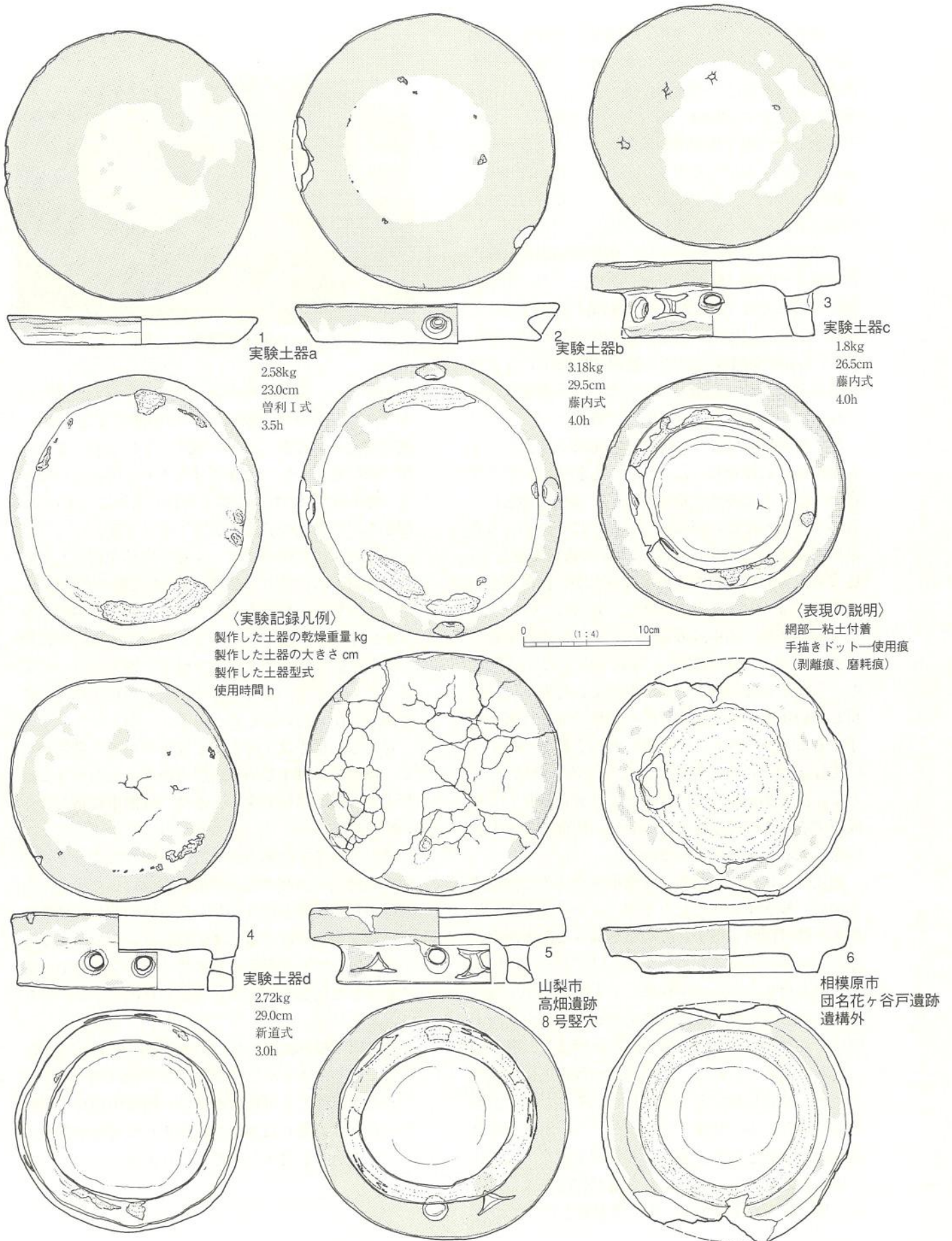
大きさが不足するという課題が生じる。

II段階—土器底部を模した円盤形の出現。ただし円盤形では手をかけにくく、移動が困難。

III段階—円盤に脚をつけた円筒形が出現。台面の高さが生まれ、作業性が改善される。ただし円筒形では持ちにくく、回しにくい。

IV段階—器台形の出現。移動、回転の際に保持することができ、作業性が向上する。

田中氏の実験では台形土器が製作途中の土器の水分を吸収し、製作時間短縮の効果があることを明らかにし、予想外の効能を見出すこととなった。昨今



第7図 使用実験に用いた台形土器 (1~4) との比較

(相模原市立博物館蔵)

の土器作り教室では、室内の作業机に置かれた金属製の陶芸用回転台、あるいは板が用いられ、乾燥が進まないと土器下半の水分が多くなり、大型品では重みに耐えかねて傾き、崩れるケースがある。粘土中の水分を台形土器が吸収する、という点は実験を通して初めて判明した事実であり、土器製作台として優れた機能であったことがわかる。この点については筆者の実験でも追認している。

台形土器の変遷については、中期初頭以降、藤内式期頃までD類（底部転用例）が残る一方、中期初頭にすでにA類（円盤形）、短脚C類が存在することから、必ずしも田中氏の推測どおりではないものの、B類からC類が出現していく過程に関して、改良点の改善という形で変遷していったという想定については、おおむね同意できる内容である。

筆者の実験ではA・B・C類の各形態を準備し、4人が地面で製作を行った。いずれも粘土円板をまず台形土器の上に乗せ、輪積み技法で器壁成形を行うもので、台形土器の回転についてはそれぞれの意思に委ねて自由にやりやすいように適宜実施した。施文も基本的には地面の上で行ったが、困難なものについてはテーブル上に移動して実施している。

実験の結果、田中氏の指摘のとおり、台形土器が粘土中の水分を非常によく吸収することが判明した。したがって積み上げ速度も速く、時間的には使用しない状況の2分の3程度の速度で成形作業を終了することができた。その際、台形土器の回転については予想したほど頻繁に回転させることはなく、とくに高さ30cm程度まではほとんど動かさなくても成形できる。口縁部付近の成形時、内面のナデ調整の際に動かす必要が生じている。

施文時ではまず口縁部で区画単位を決めて割付けを決め、施文することになるが、モチーフとなる隆線文の貼付段階では半回転的な小刻みな動きが生じる。その後は1面1面文様を仕上げて行くことになり、動きは少ない。いずれにしても製作者が土器の周りを回るのではなく、土器をのせた製作台を回すというあり方が通常と考えられる。つまり、製作台の場所を決めて設置し、その周りの敷物上に粘土塊を置き、さらに施文具や調整具を配置した上で土器製作に取り掛かる状況下では、それらの粘土、道具の配置に規制されて、製作者も製作位置が決定されて固定化されてしまう。また土器製作時の腰をおろして座り込んだ姿勢では、製作者が動きにくい。



写真7 台形土器使用痕（実験土器d）

製作中の土器は乾燥がある程度進まないと受け面から分離できない。強引にヘラで剥がそうとすると、底部周辺の受け面にキズを残すことになる。また分離の際に粘土の粘着力が受け面よりも勝っていたとき、受け面表面の粒子や器面を持ち去ることとなり、細かなアバタ状の剥離痕が生じる（写真7）。

粘土の付着については、土器の底部が密着していた中心付近にはほとんど付かず、周辺部から鏝側面、裏面、脚側面に付いた。粘土のついた手で台形土器に触れるために生じるもので、製作中の土器が乾燥して受け面から分離するまで台形土器をきれいにすることもできないので、薄く付着した粘土はそのまま固くこびり付いてしまう。

付着した粘土は土器と同じ成分のため、粘性が高く、乾燥すれば土器同様に堅くなる。したがって台形土器の器面に付着すると水洗では簡単に落ちにくい状況になる。

また、推測ではあるが、数回の製作によって受け面中央付近のアバタ状の使用痕が進行した場合、初回時の実験結果とは異なり、使用痕の荒れ面に粘土が付着するようになると考えられる。また、底部側にもうまくすれば台形土器の受け面の荒れをそのまま転写した圧痕をとどめる事例を見出すことができると思われる。

受け面の擦痕については、土器底部が分離した後、施文や調整するために、土器のみを受け面の上で回したときに生じる可能性が高い。稲荷山遺跡で指摘された凸部の擦れはある程度硬化した底部が接触することで凸部を削ったと考えておきたい。

XI. 集落と台形土器

山梨県内で台形土器が発掘調査によって出土した遺跡は次のとおりである。各遺跡の台形土器点数、中期集落の動向、集落の様相等についても付記する。

遺跡名 (所在地)	点数 (時期)	時期	集落規模等
1 釈迦堂遺跡群SI区 (勝沼・一宮町)	9点、	中期中	初～末、土偶多数、釈迦堂遺跡群SIII・IV区 270点、中期中～末、大規模集落、土偶多数、釈迦堂遺跡群SV区 14点、中期前半～末、土偶多数
2 宮の上遺跡 (勝沼町)	3点以上、	中期中～後半、	大規模集落か、土偶多数
3 三光遺跡 (御坂町)	1点		
4 桂野遺跡 (桂野平石遺跡を含む、御坂町)	10点、	中期中～末、	大規模集落、土偶多数
5 一の沢遺跡 (境川村)	1点、	中期前半～末、	大規模集落か、中期堅穴数25
6 西原遺跡 (境川村)	1点、		
7 上の平遺跡 (中道町)	1点		
8 安道寺遺跡 (塩山市)	3点		
9 乙木田遺跡 (塩山市)	1点		
10 町田遺跡 (塩山市)	9点		
11 坂井遺跡 (韮崎市)	14点、	中期中～末、	土偶多数出土
12 石之坪遺跡 (韮崎市)	5点、	中期中～末、	大規模集落
13 下馬城遺跡 (韮崎市)	1点		
14 社口遺跡 (高根町)	1点、	中期前半～後半	
15 柳坪B遺跡 (長坂町)	1点、	中期中～末	
16 酒呑場遺跡 (長坂町)	10点、	中期中～末、	大規模
17 小屋敷遺跡 (長坂町)	1点		
18 原町農業高校前遺跡 (長坂町)	30点、	中期前半～後半、	大規模環状集落
19 唐松遺跡 (双葉町)	3点、	中期中～後半	
20 高畑遺跡 (山梨市)	数点、	中期前半～後半、	土偶多数

上記遺跡のほかに集落規模の大きな遺跡は多数存在するが、台形土器の出土は報告されていない。

上記遺跡の特徴を整理しておく。

- ①規模が大きく長期的な集落で、地域的には中核的集落。その他の遺跡でも、範囲が大きく括られた遺跡が多い。
- ②ある程度、分布にまとまりが見られる。塩山市付近、御坂山地北麓、韮崎市付近、八ヶ岳南麓に集中し、縄文中期集落の多い地域であるとともに、釈迦堂遺跡群や塩山市周辺のように、良質な扇状地性の粘土が堆積した地域でもある。
- ③集落によっては多量の台形土器が出土する。また調査面積の狭い遺跡でも多数出土の傾向がある。

④土偶や土製品が多い。

⑤焼成粘土塊、生粘土塊など、土器製作関連遺構・遺物が出土する。

山梨県域でのあり方をモデルとすると、一案として次のような想定ができる。

モデル1 土器製作は拠点的な大規模集落で行われ、周辺小規模集落に土器が流通した。

上記と違うあり方を示すのが相模川上流域である。多摩NTNa248遺跡で大規模な粘土採掘坑が発見され、その周辺にあたる相模川上流域には台形土器をはじめとして土器製作関連遺物を出土した遺跡が集中する。台形土器を土器製作と関連した遺物として捉えるうえで、重要なあり方を示している。

相模川に沿って半径5km以内に数遺跡が分布し、台形土器と粘土・未焼成土器が出土したNa245遺跡がNa248遺跡に最も近いほか、Na939遺跡、Na210遺跡、橋本遺跡が点在する。台形土器の点数、集落規模等は以下の通りである。

遺跡名 (所在地)	点数	中期時期	集落規模ほか
1 多摩NTNa245遺跡	66点		
2 多摩NTNa939遺跡	36点		
3 多摩NTNa210遺跡	6点		
4 橋本遺跡	119点		

Na248以外にも土器採掘坑群の存在が推測されるところではあるが、一応、Na248から周辺集落に粘土が運ばれ、台形土器が土器製作に用いられたとすると、半径5km程度のごく狭い地域内に多数の土器製作集落が存在することになる。これは、大規模粘土産地をひかえた局地的なあり方とも捉えられる。報告書の考察にもとずき、相模川上流域のあり方をモデル化すると一案として次のようになる。

モデル2 粘土採掘場を周辺集落で共同管理したか、あるいはひとつの集落が権利をもち管理を行い、共同採掘することで、採掘坑群の周辺に土器製作を行う集落が分布する。製作された土器は自家消費されるとともに、地域的に流通した。

現状では製作された土器の流通まで言及することは難しいものの、1集落100点を超えるような台形土器の出土量は自家消費を超えたあり方といえ、土器製作を集中的に行った集落の可能性があると考えられる。

第1表 山梨県内の台形土器集成 (孔配置については2孔4単位の場合、2・4と表現する)

遺跡名	所在地	遺構名	番号	分類	時期	径	器高	孔配置	備考	文献					
1 釈迦堂遺跡群 越北A地区 (SⅠ)	東八代郡一宮町千米寺	SB01	1	A?	藤内	25.9	2.7	0		小野正文1986「釈迦堂Ⅰ」山梨県教委ほか					
			2	C		20.2	4.4	2?							
			3	B?		24.0	(2.8)	?	脚欠損						
			4	A?		25.9	3.3	0?							
			5	A?		24.7	2.4	0?	裏面に孔?						
			6	B		22.0	(2.7)	?	脚欠損						
			7	AかB		26.2	2.1	0?	小破片						
			8	B		27.5	(2.7)	?	脚欠損						
			9	A		21.8	1.7	0?							
			遺構外												
2 釈迦堂遺跡群 三口平神地区 (SⅢ)	東山梨郡勝沼町藤井	SB29	10	B	曾利Ⅰ	19.9	(3.4)	?		小野正文1987「釈迦堂Ⅱ」山梨県教委ほか					
			11	B		20.9	12.6	1-4							
			12	B		22.0	3.7	0							
			13	B		20.8	7.4	0							
			14	B		19.8	(4.7)	2-4							
			15	B		22.4	3.9	1-4	片減り						
			16	B?		36.0?	(5.0)	?	小破片						
			17	B		25.3	3.1	?	脚完全磨耗、裏面文様						
			18	B		25.6	(3.5)	?	脚破損						
			19	B		24.7	6.1	1-4?							
			20	B		22.4	6.4	0							
			21	B		20.8	6.7	1-4?	受け面窪む						
			22	B?		18.9	2.4	?	脚欠損						
			23	A?		24.5	2.5	0	鈎側面沈線文						
			遺構外												
			24	A		18.6	2.2	0	黒変						
			25	C		24.5	3.7	1-?							
			釈迦堂遺跡群 三口平神地区 (SⅣ)	東山梨郡勝沼町藤井		SB18	26	B	井戸尻?		24.9	4.3	0?		小野正文1987「釈迦堂Ⅱ」山梨県教委ほか
							27	B			24.2	4.0	0	脚磨耗	
							28	B			18.3	3.7	0	脚磨耗	
							29	B			27.7	9.1	0	住居内袋状土坑	
							30	B			20.3	4.7	0	脚磨耗	
							31	B			22.0	5.4	0		
							32	B			17.8	(5.5)	0	裏面文様	
							33	B?			20.6	2.7	0	裏面凹み	
34	B	22.0			5.8		0								
35	B	23.8			6.8		0	受け面大きく窪む、裏面文様、脚磨耗							
36	B	19.8			4.7		0	脚磨耗							
37	B	23.6			4.9		0	脚磨耗							
38	C	27.9			5.1		2-5								
39	A	29.8			3.0		0								
40	B	17.9			6.2		0								
釈迦堂遺跡群 三口平神地区 (NⅣ)	東山梨郡勝沼町藤井	SB01	41	B	井戸尻	21.3	6.4	1-4?	鈎側面沈線文	小野正文1987「釈迦堂Ⅱ」山梨県教委ほか					
			42	B		25.6	(3.3)	?	脚欠損						
			43	B		18.8	5.4	1-?							
			44	B?		27.9	(2.9)	?							
			45	C		21.0	2.5	2-?							
			46	B		23.7	5.3	1.5分6							
			47	B		22.9	3.9	?							
			48	C		29.9	5.1	1-?							
			49	A		28.4	3.7	0							
			50	A		20.9	1.8	0							
			51	B		20.6	3.0	?	脚欠損						
			52	B		19.4	4.1	?	脚欠損						
			53	B		20.2	3.6	?	脚欠損、鈎側面文様						
			54	A		30.0	2.7	0							
			55	B?		26.8	2.1	?	脚磨耗?						
3 釈迦堂遺跡群 野呂原地区 (SⅤ)	東八代郡一宮町野呂原	2号住	42	B	曾利Ⅱ	25.6	(3.3)	?		長沢宏昌1987「釈迦堂Ⅲ」山梨県教委ほか					
			43	B		18.8	5.4	1-?							
			44	B?		27.9	(2.9)	?							
			45	C		21.0	2.5	2-?							
			46	B		23.7	5.3	1.5分6							
			47	B		22.9	3.9	?							
			48	C		29.9	5.1	1-?							
5 宮之上遺跡	東山梨郡勝沼町勝沼	6号住	49	A	井戸尻	28.4	3.7	0		小林謙一2001「勝沼町宮之上遺跡6号住居跡出土の中期前葉土器について」山梨県考古学協会誌12					
			50	A		20.9	1.8	0							
			51	B		20.6	3.0	?	脚欠損						
			52	B		19.4	4.1	?	脚欠損						
			53	B		20.2	3.6	?	脚欠損、鈎側面文様						
			54	A		30.0	2.7	0							
			55	B?		26.8	2.1	?	脚磨耗?						
			56	A		23.9	2.7	0							
			57	A		27.9	2.9	0							
			58	C		19.2	3.0	0							
59	D	16.4	5.1	0											
60	D	18.1	3.0	0											
8 三光遺跡	東八代郡御坂町竹居	S地点	61	B	?	20.3	5.0	0	小野正文ほか1979「御坂町の埋蔵文化財」甲斐丘陵考古学研究会ほか						
9 桂野平石遺跡	東八代郡御坂町下黒駒	住居跡	62	D	新道	17.0	3.7	0	小野正文ほか1979「御坂町の埋蔵文化財」甲斐丘陵考古学研究会ほか						
10 桂野遺跡	東八代郡御坂町下黒駒	1号壱穴	63	B?	曾利Ⅱ	?	?	1-?		橋岡功一2004「桂野遺跡-取付農道地区-」御坂町教委ほか					
			64	B		?	5.0	0							
			65	D		新道	18.3	2.2	0						
			66	B		曾利Ⅰ	23.9	(2.0)	?						
			67	B		?	17.4	2.8	?		脚磨耗				
			68	D		?	17.5	1.8	0						
			69	B		?	?	2.6	0						
			70	B		?	20.3	4.0	0						
			71	B		?	25.4	3.2	0?		脚磨耗				
			72	B		?	?	3.0	0						
73	A	?	36.4	2.8	0										
10 一の沢遺跡	東八代郡境川村小黒坂	5号住	74	B	曾利Ⅰ	15.0	6.5	0	小林広和ほか1989「一の沢遺跡調査報告書」山梨県教委ほか						
11 西原遺跡	東八代郡境川村小山	SI13	75	B	藤内	20.2	4.5	0	使用痕なし	野崎達2002「西原遺跡・柳原遺跡(2次)」境川村教委ほか					
12 上の平遺跡	東八代郡中道町下向山	16号住	76	B	藤内	21.4	8.9	1-5	完形	中山誠二1987「上の平遺跡」山梨県教委					
13 安道寺遺跡	塩山市中萩原	6号住	77	C	井戸尻?	16.7	4.7	0		小林広和ほか1978「安道寺遺跡調査報告書」山梨県教委					
			78	B	曾利Ⅱ	22.1	7.7	0	床面上						
			79	B	井戸尻	26.4	3.5	0	脚磨耗						
			80	B	井戸尻	21.5	6.4	0							
14 乙木田遺跡	塩山市竹森	遺構外	81	A?	?	21.1	3.0	0	十妻殿武1996「塩山市史 資料編 第1巻」塩山市						
15 反田遺跡	塩山市	採集品	82	B		21.8	5.3	0?	鈎側面文様、脚磨耗	山梨県考古学協会2002「土器から探る縄文社会」					
			83	C		22.1	3.2	1-?	鈎側面文様、脚磨耗						
			84	B		25.0	(3.0)	?	脚欠損						
			85	B		19.9	6.9	0	完形						
			86	B		24.0	5.0	1-7							
			87	B		24.3	4.8	2-4	ほぼ完形						
			88	B		19.9	(4.8)	?	脚欠損						
			89	B	藤内Ⅱ	22.2	4.8	1-1?	片減り、孔は盲孔						
			90	B		26.6	5.2	1-8か							
			91	B		26.8	4.2	0							
17 大木戸遺跡	塩山市下於曾	2号住	92	C	諸磯 b	23.3	7.6	0		小林孝子2003「大木戸遺跡」山梨県教委ほか					
			93	C		35.1?	6.5	0	裏面赤色塗彩あり						
			94	B		24.4	3.8	?	脚磨耗顕著、受け面中央に赤色塗彩						
17 清水田遺跡	山梨市下石森	採集品	95	B		26.0	2.7	?	脚磨耗	山梨県考古学協会2002「土器から探る縄文社会」					
18 北後田遺跡	韭崎市藤井町坂井	A区3号住	86	C?	曾利Ⅱ	不明	(7.8)	2-?	脚部片	山下孝司1990「北後田遺跡」韭崎市教委ほか					

遺跡名	所在地	遺構名	番号	分類	時期	径	器高	孔配置	備考	文献		
19 坂井遺跡	山梨県市川町坂井		97 A			19.9	3.4	1-4		室伏徹1976『台形土器について』「丘陵」1・2甲斐丘陵考古学研究会		
			98 A			23.1	3.4	0				
			99 A			25.3	3.4	1.2	瘤状突起2箇所			
			100 C			19.8	5.2	2?				
			101 C?			不明	(6.8)	2?				
			102 C			19.9	8.8	2-4				
			103 B			20.9	9.2	1.6				
			104 B			19.8	9.5	2.2				
			105 B			19.8	7.5	2.2				
			ハ号竪穴			106 B		23.7	8.2		0	
						107 B		21.1	(3.9)		?	
			108 B		22.1	6.9	1.6					
			109 B		20.1	5.0	2?					
		包含層	110		33.4?	3.3	1-?	表面一部赤彩	関根俊明ほか1998『坂井遺跡』山梨県教委ほか			
21 石之坪(東)遺跡	山梨県市川町上田井		11号住	111 D	藤内	19.3	4.0	0	割れ口を整形	藤原功一2000『石之坪遺跡(東地区)』石之坪遺跡発掘調査会ほか		
			24号住	112 B	曾利Ⅲ	22.6	2.0	?	脚欠損			
			11号住	113 B?	藤内	?	?	1-?				
			38号住	114 B	曾利Ⅳ	18.6	(4.0)	?	側面に沈線文			
			39号住	115 C	曾利Ⅱ～Ⅲ	17.3	(2.8)	2-?				
23 下馬城遺跡	山梨県市川町下馬城	2住	116 B	井戸尻	22.5	(3.6)	?	破片	山梨県考古学協会2002『土器から探る縄文社会』			
24 社口遺跡	山梨県北巨摩郡高根町社口	31号住	117 C	曾利Ⅰ	23.8	(2.9)	1-?	中央に孔	藤原功一1997『社口遺跡第3次発掘調査報告書』社口遺跡発掘調査会			
25 柳坪B遺跡	山梨県北巨摩郡長坂町八田	16号住	118		曾利Ⅴ	14.1	5.9	1-?		末本健1975『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-北巨摩郡長坂・明野・山梨県内』山梨県考古学研究会		
26 酒呑場遺跡	山梨県北巨摩郡長坂町酒呑場		I区10号住	119 A	藤内	26.3	2.9	0	台形土器と粘土がセット	山梨県考古学協会2002『土器から探る縄文社会』		
				120 D	藤内	16.6	2.1	0	生粘土塊とセットでピット内出土			
			I区33号住	121 C	藤内	19.8	6.8	1-5				
				122 C	藤内	24.1	3.1	0				
			I区17号住	123 A	猪沢～新道	23.4	3.2	0				
				124 D		14.1	1.8	0				
			I区49号住	125 D?	藤内	19.0	3.0	0				
G区遺構外	126 C	?	23.5	4.1	0		小宮山隆1996『酒呑場遺跡 G区』長坂町教委					
27 小屋敷遺跡	山梨県北巨摩郡長坂町八田	C区東	127 C	?	?	16.5	4.9	0?	小宮山隆1997『小屋敷遺跡』長坂町教委			
29 上神取遺跡	山梨県北巨摩郡明野村上神取	採集品	128 C	?	?	22.8	6.0	1-7	山梨県考古学協会2002『土器から探る縄文社会』			
30 唐松遺跡	山梨県北巨摩郡双葉町唐松		4号住	129 C	五領ヶ台Ⅱ	17.8	2.1	0		石神孝子ほか1996『唐松遺跡』山梨県教委ほか		
				130 A		20.9	2.0	0				
			100号土坑	131 A	猪沢	23.5	2.6	0				

結 語

台形土器の用途は、使用痕観察、土器底面との比較、および製作実験の結果から土器製作台であった可能性が高いと考え、出土状況を検討し、使用実験によって検証を試みた。東日本各地で出土する台形土器がすべて土器製作台であったかどうかについては今後の課題であるが、使用痕の状況には各地の事例に共通性があり、同じ使われ方をした結果と考えられる。ただ中部～西関東地方では台形土器が土器製作台の主流と考えられるのに対し、東北各地ではあくまでも客体的な存在で、どの程度の存在感、存在意義があったのかは不明である。使用実験に関しては田中洋二郎氏による実験の検証的な意味合いを含め、筆者なりの視点で実施したものであったが、田中氏と同じ見通しを得ることができた。

ところで、縄文土器のように平坦な面に粘土円盤を置き、粘土帯を積み上げる、という土器製作技法は、世界的にみて今日知られている民族事例と比較すると特殊であり、先史時代のロクロ出現以前の特徴ともいえる。とくに縄文中期は隆線による立体的な文様が極度に発達した時期で、新井司郎氏も指摘するように、安定した平坦面の確保なしでは、中期

土器の出現はなかったと考えられる。つまり、そこには土器製作台としての台形土器、あるいは台形土器に類した台の存在が必ずあった、と考えておきたい。今回の実験で土器製作台としての見通しを得ることができたが、立証するには至っていない。今後、各地の事例観察を進める中で、工藤氏が先鞭をつけられたように顕微鏡観察、使用痕の記録化作業が必要と考えられ、実験的に生じた使用痕と出土品を比較検討する必要がある。また台形土器の使用実験を繰り返すことで、片減り現象等の使用痕の生成について明らかにしていきたい。さらに土器底部の視点から縄文時代全般に視野を広げ、製作技法の変遷について考えていきたい。

なお、本稿を執筆するにあたり、資料見学、文献提供などで、下記の方々の多くの方々、諸機関からご配慮、ご協力をいただいた。また都留文科大学、帝京大学、東京大学の考古学研究会の学生には台形土器を用いた土器製作実験のため、ご協力いただいた。すべての方々に心よりお礼申しあげる次第である(敬称略)

山本孝司、竹尾進、小栗一夫、長佐古真也、佐野勝広、芹沢昇、保坂康夫、米田明訓、三田村美彦、室伏徹、工藤幸尚、田中洋二郎、中村信博、塚本師

也、飯島泉、清水徳夫、佐野隆、今福利恵、野崎進、甲斐丘陵考古学研究会、土屋健作、塩谷風季、初鹿野博之、釈迦堂遺跡博物館、山梨県埋蔵文化財センター、塩山市教育委員会、栃木県埋蔵文化財センター、相模原市立博物館、東京都埋蔵文化財センター。(帝京大学山梨文化財研究所)

引用・参考文献

- 鳥居龍蔵 1926『先史及原史時代の上伊那』信濃教育会上伊那部会
- 杉山寿栄男 1928『日本原始工藝』(1976復刻 北海道出版企画センター)
- 八幡一郎 1932「人工遺物(A)」『人類学教室研究報告 第5編 下総姥山ニ於ケル石器時代遺跡 貝塚ト其ノ貝層下発見ノ住居址』東京帝国大学
- 志村滝蔵 1932「七里岩南部の先史遺跡及び遺物について」『武蔵野』18-3
- 後藤守一 1933「竊原石器時代住居遺蹟」『東京府史跡保存物調査報告書』第10冊
- 永峯光一 1950『平出』平出遺跡調査会編
- 渡辺忠胤 1961「八王子市犬目町中原遺跡発掘報告」『多摩考古』2
- 八幡一郎 1963「縄文土器・土偶」『陶磁全集』平凡社
- 志村滝蔵 1965『坂井』
- 武藤雄六 1965「生活用具としての土器」『井戸尻』
- 新井司郎 1973「土器の台」『縄文土器の技術』中央公論美術出版
- 谷井彪 1974『坂東山』埼玉県教委
- 高津図書館友の会郷土史研究部1974「西菅遺跡第三地点発掘調査概報」『高津郷土史料集』第11篇
- 室伏徹 1976「台形土器について—坂井遺跡出土例を中心にして—」『丘陵』1-2 甲斐丘陵考古学研究会
- 武藤雄六 1978『曾利』富士見町教委
- 小林達雄 1979『縄文土器Ⅰ』講談社
- 沼崎陽 1982「土製品」『神谷原Ⅱ』八王子市櫛田遺跡調査会
- 上川名昭 1983「器台形土器」『中期縄文文化論』
- 岩淵一夫 1985「上欠遺跡」栃木県埋蔵文化財発掘調査報告書第69集
- 斉藤弘道 1985『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11 南三島遺跡6・7区』茨城県教育財団文化財調査報告第30集
- 小野正文 1986『釈迦堂Ⅰ』山梨県教委ほか
- 小野正文 1987『釈迦堂Ⅱ』山梨県教委ほか
- 長沢宏昌 1987『釈迦堂Ⅲ』山梨県教委ほか
- 森田安彦 1987「台状土製品のはじまり」『東京の遺跡』16 東京考古談話会
- 大貫英明 1987『橋本遺跡Ⅶ』相模原市橋本遺跡調査会
- 佐々木克典 1988『南八王子地区遺跡調査報告4 滑坂遺跡』八王子市南部地区遺跡調査会
- 森田安彦 1990「器台形土器について」『精進バケ』精進バケ遺跡調査会
- 岡本勇 1992『下原遺跡』相模原市当麻・下溝遺跡群調査会
- 1994『多摩ニュータウン遺跡—No.300遺跡—』東京都埋蔵文化財センター
- 奥山和久 1997「台状土製品の分布と時期について」『多摩考古』27 多摩考古学研究会
- 丹野雅人 1997『多摩ニュータウン遺跡No.72・795・796遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第50集
- 友松論 1997『久保上ノ平遺跡』南箕輪村教委
- 山本孝司 1998『多摩ニュータウン遺跡—No.245・341遺跡—』東京都埋蔵文化財センター
- 新津健 1999「器台形土器」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』
- 及川良彦 2000『多摩ニュータウン遺跡—No.247・248遺跡—』東京都埋蔵文化財センター調査報告第80集
- 阿部勝則 2001「岩手県内出土の縄文時代中期の器台について」『紀要』XX (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 及川良彦・山本孝司 2001「土器作りのムラと粘土採掘場—多摩ニュータウンNo.245遺跡とNo.248遺跡の関係—」『日本考古学』11 日本考古学協会
- 中村信博 2001「縄文時代の茂木」『茂木町史 通史編』山梨県考古学協会
- 2002『土器から探る縄文社会』
- 山本孝司 2002「粘土採掘と土器製作—多摩ニュータウン遺跡の事例より—」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会
- 室伏徹 2002「台形土器研究の現状と課題」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会
- 保坂康夫 2002「酒呑場遺跡Ⅰ地区における台形土器と機能」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会
- 正木季洋 2002「原町農業高校遺跡出土台形土器について」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会
- 榎原功一 2002「土器作りのムラ」『土器から探る縄文社会』山梨県考古学協会
- 石神孝子 2003『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第205集 山梨県教委ほか
- 田中洋二郎 2003「再現実験から見た、台形土器の製作技法と用途」
- 工藤幸尚 2004「台形土器について」『稲荷山』大栄町教育委員会・稲荷山遺跡調査会
- 榎原功一 2004『桂野遺跡—取付農道地区発掘調査報告書—』山梨文化財研究所

註

- 1) ただし実見したところ、受け面(台面)の使用痕については回転運動によるものと認識するには弱く、接地面の使用痕もかすかであった。